

2011-2012

日本語・日本文化
研修留学生
論文集

秋田大学

目次

有島武郎と〈葉子の愛〉

金 知慧

キム ジヘ，慶北大学校（大韓民国・大邱広域市）

大学生から社会人へ

——アルバイトが心のユトリを作る

蔡 佳凝

サイ カギョウ，黒龍江大学（中華人民共和国・黒龍江省）

おわりに

牲川 波都季

セガワ ハヅキ，秋田大学（日本・秋田県）

有島武郎と〈葉子の愛〉

秋田大学教育文化学部

日本語・日本文化研修生

金知慧

目次

I. はじめに	2
II. 先行研究	3
III. 有島武郎	4
1. 有島武郎の生涯	4
2. 有島武郎の『或る女』の世界	6
IV. 葉子という女：本能	7
1. 矛盾した本能(?)	8
2. 急進的な女性(?)	9
V. 葉子の男：屈辱	12
1. 侮辱の過去：木部	12
2. 屈辱の未来：倉地	14
VI. 葉子の愛：死	16
1. 生の不安	17
2. 病による死	19
VII. おわりに	22
後書き	26
参考文献	27

I. はじめに

「純粋な、その代り冷えもせず熱もしない愛情が何んだ。生きる以上は生きてるらしく生きないでどうしよう。愛する以上は命と取り代えっこをする位に愛せずにはいられない。」(p. 265)^①

葉子は愛をした。その葉子の愛は、愛のための愛であった。葉子にとって自然に迫ってきた愛は、逃げることのできない絶対的なものであった。しかし、葉子は、倉地との愛をしながら生きて行こうとすることによって、自分の周りのすべての世界から追い出されるようになる。親戚からも、友達からも、社会からも。また、自己という存在からも離れられる。外面の美しさからも、肉体の健康からも、その精神からも。そして、愛の相手の倉地からも。その過程の中で、葉子は愛をするために、また、生きるために、苦しみがき続ける。その葉子の姿は惨めながらも、また強烈であった。

非社会的な愛をした葉子。この有島武郎は<葉子の愛>をどう思っていたのだろうか。「愛する以上は命と取り代えっこをする位に愛せずにはいられない。」葉子の愛は、命と取り代えっこする位の愛、愛のための愛であった。葉子が自分の愛をすることによって得たものは何もなかった。少なくとも、倉地との未来だけでも得られたら、私たちは葉子の愛を批判しやすかっただろう。しかし、最後には、葉子自身も苦しみながら死に向かって行く。その惨めな結末は、逆に考えて見れば、葉子の愛だけは肯定する結果になるかも知れない。

しかし、有島武郎はこの<葉子>をどう思っていたのだろうか。「間違っていた……こう世の中を歩いて来るんじゃないかった。然しそれは誰れの罪だ。分からない。然し兎に角自分には後悔がある。」(p. 534~p. 535) 葉子は自分の人生を後悔している。そして、最後に惨めな死に向かっていく。「生きる生きる……死ぬのはいやだ……人殺し!……」(p. 551) 葉子は生きようとしながら、死んで行く。生きようとする葉子を、作者の有島武郎はどうかして惨めな最後に向かわせるようにしているように見える。こんな葉子を肯定することは、読者にとってなかなか難しいことになってしまう。

有島武郎は『或る女』のなかで、<葉子の愛>と<葉子>をどう判断、どう思っていたのだろうか。もし、葉子の愛を肯定するなら、葉子を肯定することにもなる、葉子の愛を否定するなら、葉子を否定することにもなるのではないか。しかし、有島武郎は<葉子の愛>と<葉子>に対する思いに矛盾を抱えているように見える。有島武郎が『或る女』の<葉子の愛>を通じて、本当にいいかかったことは何なのだろうか。また、<葉子の愛>と<葉子>に対する有島武郎の思いということとはどんなものであろうか。

^① 有島武郎 (1995). 『或る女』新潮社. 以下同じ文献からの引用。

Ⅱ. 先行研究

『或る女』に対する色々な先行研究を探して読んでみた。有島武郎の代表作である『或る女』は、長い間色々な方向で、たくさんの研究者たちによって研究されて来た。私は<葉子><愛><有島武郎><死>をキーワードとして注目して、先行研究を選んだ。その論文の中には、私が疑問に思っていることの答えに近いものもあり、もっと疑問に思わせるものもあった。ここでは、江種満子(1977)「葉子の死、もしくは有島の方法について」の論文を分析することによって、私の論文の方向性を説明したいと思う。

・江種満子 (1977). 葉子の死、もしくは有島の方法について『国文学 解釈と教材の研究』22(10)、p. 138~p. 146.

→江種(1977)の「葉子にはなぜ死を選ぶ自由が与えられなかったのか。」(p. 139)という問いは、私の問いに近いものであった。私は葉子の死に拒否感を持っていた。なぜ葉子は必ず死ななければならなかったのだろうか。しかし、それよりもっと私を疑問に思わせたのは、最後まで生きてがる葉子の意志に反する病による死、その死に方であった。もし、葉子が自殺をしたとしたら、その死に方について今ほど疑問に思っはいなかったのだろう。

私は葉子の死のことにに関して、作者の有島武郎の存在を意識しないではいられなくなった。葉子の死について、江種(1977)は「「作者有島の強引さ」、という性格の問題として考えるべきものではないだろうと思う。」(p. 138)と言った。しかし、私は葉子の死に方には、作者の有島武郎の強引さが確かにあり、望まない時に訪れる死の苦痛を、自殺することのできない葉子を通じて見せる必要が、有島武郎にはあったと思う。

江種(1977)の「葉子が倉地を愛したことは、彼女の全存在を賭け、かつて temperament の自然に従った行為であり、」(p. 144)の意見に、私は同意する。しかし、「『或る女』には、その全体の構造を大きく見通すばあい、葉子が「人全体」として志向するものに二つの面があることがわかる。そしてそれは葉子の矛盾そのものでもあると考えられる。」(p. 144)「いわば個として自立したい感情と、逆に個でありつつも他に帰属したいという感情とが、葉子の存在の根源にあって対立している。」(p. 145)の意見には、完全に同意することができない。

私は、葉子がかつて temperament の自然に従った人であり、自己内に矛盾を持っていた人ではないと思う。上の、江種(1977)が言っている矛盾は、葉子の矛盾ではなく、愛の矛盾ではないだろうか。愛は個として存在しないと成立できない感情であり、いざ愛するようになると個であることに苦しみを感じるようになる感情であるからだ。

「この願望の新しさ—自己の存在の可能性の実現を願って生きようとする激しさと、目的の明瞭さにおいて、」(p. 145)「葉子は生の重たさを、その重たさなりに引き受けるのであって、けっして放棄しはしなかったのである。」(p. 146) 江種(1977)のこの意見の意図は、私の意見の意図と同じ方向を示している。しかし、その方向に進んでいく方法は、お互いに違う。私は、葉子から目的の明瞭さを感じたことがない。ま

た、生の重たさをそのまま引き受けている葉子を見たこともない。葉子の存在の強烈さは、そんなことから来たものではないと私は思う。

私はできるだけ、作者の有島武郎の視線から離れて、葉子と葉子の愛を見ようとした。その過程で、意味付けをしなくても意味のある葉子という存在、その生を見ることができた。今から、それについて論じて行きたいと思う。

Ⅲ. 有島武郎

「明白に云うと僕はああ云う人は一番嫌いだけれども、同時に又一番牽き付けられる、僕はこの矛盾を解きほごして見たくって堪らない。」(p. 205)

1. 有島武郎の生涯

『或る女』の中で、作者の有島武郎の意図を読むためには、有島武郎という人がいったいどんな人生を生きて来たのかを見て置かなければならないと思う。ここで、有島武郎の生涯を全体的にまとめておきたい。以下の内容は、『有島武郎辞典』の (p. x i -p. x x viii/p. 397-p. 417)^②をまとめて作成したものである。

有島武郎は1878(明治11)年3月4日、東京市小石川区水道町(現・文京区水道一丁目)に、父・武(たけし)、母・幸(ゆき)の5男2女の中、長男として生まれた。父の武は薩摩(現・鹿児島)藩士の出身で、29歳に上京し、大蔵省の官僚になった。母の幸は南部(現・盛岡)藩の武家の出身で、母子家庭で育てられた。母の幸は、『婦人世界』誌上への創刊号(1906. 1)からの数回の寄稿をしたり、千代田女学校の設立に関与したりするなど、様々な社会的な場に出て活躍する女性であった。二人は、文明開化の時代に対応できるよう和魂洋才を見につけるべく、長男の有島武郎を教育した。有島武郎が5歳(1883、明治16)になってからは、アメリカ宣教師夫婦から英会話の個人教授を受けた。家庭にあっては両親による武術の訓練・論語の素読・日常生活の主従の作法などの教育が、体罰をもってスパルタ式でしつけられた。

6歳(1884、明治17)になると横浜英和学校(現・成美学園)に入学するが、まもなく学習院への入学準備の

^② 江種満子 (2010). 人と文学・有島武郎—自分の「自己を生かす」こと、すべての人の「自己を生かす」こと—、有島武郎研究会(編)『有島武郎辞典』(p. x i -p. x x viii) 勉誠出版. /井上理恵 (2010). 有島武郎 年譜、有島武郎研究会(編)『有島武郎辞典』(p. 397~p. 417) 勉誠出版.

ため、9歳(1887、明治20)に退学した。めでたく学習院予備科第3年級に編入すると、学習院の寄宿舎に入って週末ごとに横浜に帰るようになる。12歳(1890、明治23)に学習院中等科に進み、18歳(1896、明治29)の7月に卒業する。有島武郎は遠い札幌農学校への進学を選ぶ。彼は学習院時代に始めた日記を、農学校入学後も続け、詳細な自己省察としての日記「観想録」へと発展させ、こののち20年近くも書き続けていく。同年、9月、札幌農学校予科第5年級に編入学し、教授の新渡戸稲造(にとべ・いなぞう)宅に奇遇するようになる。日曜日にはバイブルクラスに参加、同級生の森本厚吉(もりもと・こうきち)らと親しくなった。有島武郎は参禅したり、祖母と母が信仰する西本願寺(にしほんがんじ)を訪ねたりしたのち、森本厚吉との友情を通して臆しつつキリスト教へと接近する。21歳(1899、明治32)に、有島武郎は真の信仰を実感できない苦悩から自殺を決意し、それに同情した森本とともに定山溪(じょうざんけい)への心中行に走ったりしたが、このときには、死を回避した。その後、有島武郎は両親の反対にも関わらず自己を押し通し、23歳(1901、明治34)の3月、農学校を卒業する前に札幌独立基督教会に入会した。同年の7月に札幌農学校を卒業し、12月には1年志願兵として入営することになる。

有島武郎は除隊直後に留学の準備に入り、新渡戸が推奨したクェーカー系の名門ハヴァフォード大学に留学を決め、25歳(1903、明治36)の8月に森本とともに渡米する。ハヴァフォード大学大学院に入学して、穏やかな時間を過ごしていた有島武郎であったが、1904(明治37)年の日露戦争の開戦を切っ掛けに、キリスト教の信仰に懐疑を抱くようになった。かつては、日本での入営体験により、キリスト者の立場から「国家」の欺瞞を批判した武郎だったが、そのキリスト教さえも戦争に加担している事実、信仰の根柢が揺らぎ始めたのである。6月に大学院を卒業して、9月にはハーバード大学院に聴講手続きをする。大学より図書館に通いながら、ゴーリキー・エマーソン・トルストイなど、当代の世界文学に没頭した。その頃、日本人の社会主義者金子喜一(かねこ・きいち)と付き合っており、当時アメリカ史上最も社会主義思想と労働運動が盛り上がっていたとされるボストンの空気にふれ、また金子の妻コンガーによって女性解放運動に対する蒙を啓かれた。翌年、弁護士ピーボディの家に起居しながら、ピーボディを通して接したホイットマンの詩に惹かれ、多くの影響をもらう。

29歳(1907、明治40)の4月に帰国し、9月から11月までの入営をへて、1908(明治41)年の1月から母校の東北帝国大学農科大学に英語教師となって赴任する。入営中、渡米前からの知り合いである河野信子(こののぶこ)との結婚がかなわなくなったことを知った衝撃、その悲しみから身を守るように遠く札幌に逃げてきたのだと、有島武郎の「観想録」に書いてある。そのあと、31歳(1909、明治42)に武郎は、20歳の神尾安子(かみお・やすこ)と結婚し、次々と三人の男子を得る。

有島武郎は32歳(1910、明治43)の3月の『白樺』創刊に参加し、作家活動に踏み出す。4月にシェンクウウィッチの翻案「西方古伝」を発表し、5月には札幌独立基督教会を脱退する。その後、評論「二つの道」、小説「かんかん虫」などを発表する。また、1911(明治44)年の1月より掲載しはじめた「或る女のグリンプス」は、1913(大正2)年の3月まで16回断続的に掲載されるようになる。この掲載は、恋の成就までは書いても、その後を構想することができないまま長く中断された。

38歳(1916、大正5)の8月には妻・安子を、12月には父・武を相次いで葬送した。その前に生活場を東京に移し、東北帝大農科大学も辞職しているが、父の死によって有島武郎は、有島家の家長の重責を背負った厳

しさの反面、これから職業作家として存分に活躍できる解放感も実感した。有島武郎にとって、39歳の1917(大正6)年という1年間は、嘗てない多作の年であった。妻の死にまつわる作品群「死と其前後」「実験室」、北海道のさる開拓農場に入植した集団逸脱型の小作人を描いた「カインの末裔」、ロシア革命についての複数のコメントなど、筆はとどまることがなかった。また、「惜しみなく愛は奪ふ」の初稿、「芸術の生む胎」などの評論系の著作は、生命・愛・本能・個性などの新しいキーワード、自己にはじまる一元的世界の構築をさらに目指すのであった。その年には、新潮社から有島武郎著作集第一輯『死』、同二輯『宣言』が刊行され始めた。

40歳(1918、大正7)には、「小き者へ」「石にひしがれた雑草」などの作品を発表し、12月中旬には「或る女のグリンプス」の改稿に着手した。41歳(1919、大正8)の2月に「或る女のグリンプス」の改稿を終了し、21章までを『或る女』の前編にした。3月には有島武郎著作集第八輯『或る女』前編を刊行する。その後、有島武郎は鎌倉の円覚寺に籠って、『或る女』の後編の執筆に力を注いだ。5月に後編を完成し、6月に有島武郎著作集第九輯『或る女』後編を刊行する。

42歳(1920、大正9)の6月、有島武郎著作集第十一輯『惜しみなく愛は奪ふ』を刊行してまもなく、「運命の訴え」に取り組んだものの、挫折した。そして作家としての落潮を痛感するようになる。また、自分のブルジョワ的な生活に懐疑を抱くようになる。43歳(1921、大正10)には、小説「百官舎」を発表する。44歳(1922、大正11)の1月には「宣言一つ」を『改造』に発表し、自分の階級的立場をあえて自虐的にとらえ、ストイックにブルジョワジーに踏みとどまると宣言した。3月、弟妹一同に財産処分の意向を伝え、その直後に「百官舎」に続く「星座」を一気に書いて「百官舎」と合わせ、5月に著作集『星座』として刊行した。作家としての想像力の蘇生をみせたかにみえたが、持続できなかった。母に財産放棄を告げ、個人雑誌『泉』を創刊し、自作の発表舞台を限定する。7月には有島農場に赴いて小作人一同を前に農場解放を宣言した。この頃、『婦人公論』の記者の波多野秋子(はたの・あきこ)との交際が始まっていた。45歳(1923、大正12)の6月9日、有島武郎は軽井沢の別荘で人妻の秋子との縊死心中を選ぶ。二人の遺体は、7月6日になって発見された。

2. 有島武郎の『或る女』の世界

『或る女』の主人公の葉子に、実際のモデルが存在するという事は、よく知られていることである。1901(明治34)年の9月、横浜から出発してアメリカのチャトルに向かっていた鎌倉丸の中で、当時の人々を啞然とさせる事件が起きた。その中心には、小説家の国木田独歩(くにきだ・どつぽ)の前妻で、森広(もり・ひろし)の婚約者である佐々城信子(ささき・のぶこ)と鎌倉丸の事務長の武井勘三郎(たけい・かんざぶろう)がいた。その事件の終始が新聞記事によって世間に知られたのは、それから1年も過ぎてのことである。佐々城信子の記事は、1902(明治35)年11月から「鎌倉丸の艶聞」という題の続き物として「報知新聞」に掲載された。11月8日を第1回として、合計7回にわたるスキャンダルの記事、その全体の筋を鎌倉(1986)は以

下引用のようにまとめた。それをここで示したい。

昨年九月四日、米国に向けて出発した鎌倉丸に多くの乗客があった中で、佐々城信子を中心に十数名の紳士は他の乗客と別者のように酒興にひたる事があった。佐々城信子は、母豊寿(とよひさ)の遺言に従い米国にいる許婚約者森広のもとへ赴く途中であるが、彼女に何かと手助けを与えるのは事務長武井勘三郎。然るにシャトルに着いてから一週間滞在したのみで、彼女は病気を理由にそのまま帰国する。しかしその実他の理由があったことは、当地発行の日本人という外字新聞に「事務長強姦する」との風説を揚げられたことによってもわかる通り、二人の間に何からの情実のあったのは事実である。帰国した二人は程なく東京に出で、京橋の対山館を宿にして夫婦のような挙動。しかし、実は武井には妻のほか二人の子供がある。二人は対山館の一室に身を隠して快楽に耽っていたが、其内信子は婦人病で大学病院に入院する。その後、信子が全快し退院するのを待ち、二人が芝公園の青龍寺に信子の名前で家を借りたのは昨年十二月の事である。^③

この記事のあらすじは、『或る女』の結末以外の部分のあらすじとほぼ同じである。そして、葉子以外、他の小説の人物たちにもほとんど実際のモデルが存在していた。例えば、葉子の夫であった木部は小説家の<国木田独歩>、葉子の婚約者の木村は<森広>、絵島丸の事務長の倉地は<武井勘三郎>、木村の親友の古藤は<有島武郎>である。それ以外も、多数の実際のモデルが存在している。森広の親友であった有島武郎は、自分の身近なところで起きたこの事件に強烈な印象を受けたのだろう。

有島武郎が佐々城信子の事件をモチーフにした小説の「或る女のグリンプス」を『白樺』に掲載し始めたのは1911(明治44)年の1月からである。それを『或る女』としてまとめるようになったのは1919(大正8)年の6月のことである。有島武郎が森広の親友として、佐々城信子との事件を身近なところで見ていたのが1901(明治34)年のことであるから、彼がおよそ20年近い歳月を『或る女』の世界を作るのに使っていたことが分かる。

IV. 葉子という女：本能

女性を隷属せしめている<男性に対する憎悪>と<男子^{ママ}に対する純真の愛着>の<矛盾した本能>を持ち、<自覚にめざめかけて而かも自分にも方向が解らず、社会はその人を如何取あつかふべきかを知らない時代に生まれた一人の勝気な鋭敏な急進的な女性>

『或る女』の出版後、有島武郎がこの作品について述べた幾つかの書簡、広告文などを合わせて読むと、

^③ 鎌倉芳信(1986)。「或る女」論—モデル問題を中心に—、日本文学研究資料刊行会(編)『有島武郎 日本文学研究資料叢書』(p.142)有精堂出版株式会社。

以上のような＜葉子像＞が表れてくる^④。しかし、これが葉子であると信じ込むことに、私は違和感を感じないではられない。これから、小説の内容を例として挙げながら、その理由を説明していきたいと思う。

1. 矛盾した本能(?)

女性を隷属せしめている＜男性に対する憎悪＞と＜男子に対する純真の愛着＞の＜矛盾した本能＞：葉子の女性を隷属せしめている＜男性に対する憎悪＞に関して、こういう部分がある。「葉子の眼には凡ての人が、殊に男が底の底まで見すかせるようだった。(中略)恋の始めにはいつでも女性が祭り上げられていて、ある機会を絶頂に男性が突然女性を踏み躪るという事を直覚のように知っていた葉子は、どの男に対しても自分との関係の絶頂が何処にあるかを見ぬいていて、そこに来かかると情容赦もなくその男を振捨ててしまった。」(p. 15) 19歳の葉子にとって男は底の底まで見すかせるつまらない存在で、また同時にいざとなったら自分を踏み躪るかも知れない威嚇的な存在であり、決して愛の対象ではなかった。その男に対する嫌悪の感情に、葉子の具体的な経験などはなく、ただ自分の直覚でそう判断していた。だからこそ、葉子の女性を隷属せしめている＜男性に対する憎悪＞は、解決のできない頑固なものになっている。

葉子のこういう面は木部との関係の中からも見ることができる。「一番葉子を失望させたのは同棲後始めて男というものの裏を返して見た事だった。」p. 18「木部は段々看視の眼を以て葉子の一挙一動を注意するようになって来た。同棲してから半ヶ月もたたない中に、木部はややもすると高圧的に葉子の自由を束縛するような態度を取るようになった。」(p. 19) 葉子は木部との結婚を通じて、今まで直覚としてしか感じなかったことの実体を経験するようになる。その過程の中で、女性を隷属せしめている＜男性に対する憎悪＞は深まる一方であった。

これらの例から、葉子が女性を隷属せしめている＜男性に対する憎悪＞の感情を持っているということは納得できる。しかし、＜男子に対する純真の愛着＞との＜矛盾した本能＞を葉子が持っているという部分は納得することができない。先ず、葉子と木部との関係を見てみたいと思う。上に述べたように、葉子が木部を女性を隷属せしめている男性として認識し、憎悪していたことは確かである。だから、木部が葉子の＜純真な愛着の対象＞であれば、納得できるようになるが、実はそうではない。「葉子は木部が魂を打ち込んだ初恋の的だった。」(p. 14)「自意識の極度に強い葉子は、自分の姿を木部に見付け出したように思って、一種の好奇心を挑発せられずにはいなかった。」(p. 16)「葉子に対して兼ねてからある事では一種の敵意と持

^④ 「女性を隷属せしめている＜男性に対する憎悪＞と＜男子に対する純真の愛着＞の＜矛盾した本能＞の相剋、それを＜自覚にめざめかけて而かも自分にも方向が解らず、社会はその人を如何取あつかふべきかを知らない時代に生れたた一人の勝気な鋭敏な急進的な女性＞に託して、」竹腰幸夫(1986).『或る女』論—母、葉子、愛子をめぐって—、日本文学研究資料刊行会(編)『有島武郎 日本文学研究資料叢書』(p. 30)有精堂出版株式会社。 : <>の中は有島武郎の言葉であり、その他は竹腰幸夫が加えた言葉である。

ってさえいるように見えるその母が、この事件に対して嫉妬とも思われる程嚴重な故障を持ち出したのは、不思議でないと云うべき境を通り越していた。」(p. 17)「母に対する勝利の分捕品として、木部は葉子一人のものとなった。」(p. 18) 葉子が木部の初恋の対象であることは確かだが、木部が葉子の初恋であるのかは疑問である。葉子が木部に好奇心を持つようになったのは、木部から自分の姿を発見したからで、木部を木部として認識したのではない。また、葉子は、母との戦いの分捕品として木部を自分のものにしただけである。どこを見ても、木部が葉子の愛の対象であったとは思えない。木部との関係の中の葉子から、女性を隷属せしめている<男性に対する憎悪>と<男子に対する純真の愛着>の<矛盾した本能>を見つけることはできない。

葉子の<純真な愛着の対象>は、たった一人倉地しかいない。だとしたら、葉子の中に倉地に対する矛盾の感情があったのか。確かに憎悪の感情は見えてくる。「始終一歩ずつ上手に行くような事務長が一種の憎しみを以て眺めやられた。嘗て味わった事のないこの憎しみの心を葉子はどうする事も出来なかった。」p. 134「殊に葉子の心を深く傷けたのは、事務長の物懶げな無関心な態度だった。葉子がどれ程人の心を牽きつける事を云った時でも、した時でも、事務長は冷然として見向きもしなかった。そういう態度に出られると、葉子は、自分の事は棚に上げておいて、激しく事務長を憎んだ。この憎しみの心が日一日と募って行くのを非常に恐れたけれども、どうしようもなかったのだ。」(p. 164~p. 165) 葉子が倉地に向かって抱いていた憎悪の感情は、「一種の憎しみ」「嘗て味わった事のない憎しみ」である。その憎悪の理由は確かにあって、それは自分を意識してくれない倉地の態度である。そして、その感情は「どうする事も出来ない」「どうしようもない」ものである。葉子は、倉地に対して「どうする事も出来ない」激しい愛の感情を抱いているが、それに応じてくれない倉地の冷淡さを憎悪していただけである。それは、「嘗て味わった事のない憎しみ」で、上の、女性を隷属せしめている<男性に対する憎悪>とは全然違う。それは、愛の違う言い方にしかならないものである。葉子は自分の<純真な愛の対象>の倉地に対して、矛盾の感情を持つてはいなかった。また、倉地が葉子にとって女性を隷属せしめている男性であるという内容は、小説の中のどこにも出てこない。

今までのことから「女性を隷属せしめている<男性に対する憎悪>と<男子に対する純真の愛着>の<矛盾した本能>」を葉子が持っているといえるだろうか。そうではないと思う。葉子が、女性を隷属せしめている<男性に対する憎悪>を持っていたことは確かであるが、その同じ対象に<純真の愛着>を<矛盾>して持っていたわけではない。葉子の<純真な愛着の対象>は倉地たった一人であって、倉地に対する葉子の憎悪は愛の違う言い方に過ぎないものである。葉子は自分の愛に矛盾を持っている女ではなかった。

2. 急進的な女性(?)

<自覚にめざめかけて>いる<勝気な鋭敏な急進的な女性>：葉子は、女性を隷属せしめている<男性に対する憎悪>を持っている女である。葉子のその面は、<自覚にめざめかけている>といえる部分だと思わ

れるかも知れない。でも、竹腰(1986)での指摘でもあるように^⑤、それについての認識のある葉子が、女性の経済的な自立に関心をもっていなかったことには、さっぱりしない不自然さを感じる。実際社会の問題をまともに見ていない葉子を本当の意味での〈急進的な女性〉であるといってもいいのだろうか。

「上野の音楽学校に這入ってヴァイオリンの稽古を始めてから二ヶ月程の間にめきめき上達して、教師や生徒の舌を捲かした時、ケーベル博士一人は渋い顔をした。そしてある日「お前の楽器は才で鳴るのだ。天才で鳴るのではない」と不愛想に云って退けた。それを聞くと「そうで御座いますか」と無造作に云いながら、ヴァイオリンを窓の外に抛りなげて、そのまま学校を退学してしまったのも彼女である。」(p. 14~p. 15) この例文から葉子の個性がよく読み取れる。葉子という女が、勝気な鋭敏な反抗心の強い女だということがわかって来る。葉子は親と先生などの権力を持っている人を怖がってはいない。また、納得できないことをそのまま受け止めてしまってもいい。しかし、ケーベル博士のたった一言で退学までしてしまった葉子の行動に何の意味、何の目的があったのだろうか。その部分を考えて見たいと思う。

上の例文を見たら、葉子が少なくともヴァイオリンの才は持っていることが分かる。ヴァイオリンをうまく奏でるために、必ず天才が必要なわけではない。才を持ち、努力さえすれば素敵なヴァイオリニストになれるのではないか。葉子が少しでも急進的な面を持っていたとしたら、反抗心だけを表す行動をするべきではないと思う。ケーベル博士の意見の理由を聞いたり、それが間違っていると思う主張をしたり、改善策を考えたりするべきであったのではないか。それも嫌だったら、他の音楽学校でヴァイオリンの勉強をもっとしてもよかったのではないか。でも、葉子は退学した後、二度とヴァイオリンを習ってはいない。罵られた状況から、永遠に逃げたのである。目的・理由のない葉子の反抗的な行動は、非社会的であるとはいえるが、急進的であるといえるだろうか。

実際に葉子の反抗的な行動に何の理由も、目的も、なかったことは例文から見ることができる。「女学校や音楽学校で、葉子の強い個性に引きつけられて、(中略)葉子に*inspire*されて、我知らず大胆な奔放な振舞いをするようになった。(中略)倫理学者や、教育家や、家庭の主権者などもその頃から猜疑の目を見張って少女国を監視し出した。葉子の多感な心は、自分でも知らない革命的とも云うべき衝動の為に的もなく揺ぎ始めた。(中略)真暗な大きな力に引きずられて、不思議な道に自覚なく迷い入って、仕舞には慕らに走り出した。」(p. 52~p. 53) 葉子は美貌と強い個性の持ち主であり、異性にも同性にも注目される人であった。葉子は男に対しても、学校の生活に対しても色々大胆な行動をしていた。しかし、その行動は「自分でも知らない」「衝動の為に的もなく」「大きな力に引きずられて」「自覚なく迷い入って」の結果であった。また、葉子は、木部との結婚をしたことから分かるように、大抵の女が順々に通っていく道を絶対に通って行きたくないと思っていたわけでもなかった。「それかと云って葉子はなべての女の順々に通って行く道を通る事はどうしても出来なかった。通って見ようとした事は幾度あったか解らない。こうさえ行けばいいのだろうと通って来て見ると、いつでも飛んでもなく違った道を歩いている自分を見出してしま

^⑤ 「この作品において葉子は経済的自立志向のない女性として描かれているわけで、」 竹腰幸夫 (1986). 『或る女』 論—母、葉子、愛子をめぐって—、日本文学研究資料刊行会 (編) 『有島武郎 日本文学研究資料叢書』 (p. 37) 有精堂出版株式会社.

っていた。」(p. 105~p. 106) なべての女の順々に通って行く道をどうしても通れないから、また、自然にそうになってしまうから、葉子は非社会的な道に入ってしまった。ここまで見てみると、女性を隷属せしめている<男性に対する憎悪>までも、ただの葉子の性格から来た無意識的な反抗心の発現ではないかと思われる。

「小さい頃から米国に渡って新聞記者の修業をすると口癖のように妙な事を云った」(p. 71)葉子のことはどうなのだろうか。日本最初の女性記者の羽仁もと子(1873~1957)が報知新聞に入社した時が1897(明治30)年なので、この考えこそが急進的であるのではないかと思われる。しかし、この考えが、葉子にとってどうしても実現しなければならない理想であったのか、ただの口癖に終わることであったのかによって、その本質は大きく違ってくると思う。

「何所か外国に生れていればよかったと思うようになった。あの自由らしく見える女の生活、男と立ち並んで自分を立てて行く事の出来る女の生活(中略)葉子は心の奥底でひそかに芸者を羨みもした。日本で女が女らしく生きているのは芸者だけではないかとさえ思った。」(p. 53) 葉子は「男と立ち並んで自分を立てて行く事の出来る女の生活」を望みながら、「日本で女が女らしく生きているのは芸者だけではないかと」思っている。

「これから行こうとする米国という土地の生活も葉子はひとりでに色々想像しないではいられなかった。(中略)才能と力量さえあれば女でも男の手を借りずに自分の周りの人に認めさず事の出来る生活がそこにはあるに違いない。女でも胸を張って存分呼吸の出来る生活がそこにはあるに違いない。少くとも交際社会のどこかではそんな生活が女に許されているに違いない。(中略)木村を良人にするのに何の屈託があろう。」(p. 109~p. 110) 葉子は「才能と力量さえあれば女でも男の手を借りずに自分の周りの人に認めさず事の出来る生活」を望みながら、「少くとも交際社会のどこかでは」それが実現できるのではないかと思っている。アメリカという新しいところでの生活を想像しているのに、今まで通りに自分のタクトを存分に発揮することができる場所を考えている。葉子は、基督教婦人同盟の副会長であった母親佐の活動によって催された交際の場によく出ていたし、そこでの葉子の存在感は特別なものであった。

これらの葉子の考えは、どこか食い違っている。葉子は、男と立ち並んで自分を立てて行く事の出来る女の生活を代表するのが、<芸者>であると思いき、才能と力量のある女が男の手を借りずに自分を立てて行く事の出来るところが、<交際社会>であっても満足できるといっている。新聞記者になりたいと思っていた葉子の考えとして、容易く理解できない部分なのである。

葉子は、本当に新聞記者になりたかったのだろうか。それとも、ただの口癖で終わることであったのだろうか。上の例文からみると、後者のほうに傾けられる。実際、葉子の父は日本橋では一かどの門戸を張った医師であり、財産も少なくないほうであった。葉子は幼い頃から色々教育の機会をもらっていたし、自分が女性としてちゃんとした職業を持ちたいと強く思っていたら、それが叶えられないわけでもなかった。明治時代に、女性として職業を持つことは人並みのことではなかったが、全然不可能なことではなかった。例えば、日本最初の女性記者の羽仁もと子(はにもとこ)がいて、歌集の『みだれ髪』を書いた歌人の与謝野晶子(よさのあきこ)もいた。また、葉子のモデルである佐々城信子も十代後半、札幌で臨時教員を経験したとい

う^⑥。しかし、葉子は女性として男の力を借りずに自立することを芸者という職業と交際社会という場に自ら限定してしまっている。芸者という職業を持つこと、交際社会という場での自立、これらを＜男と肩を並べる女性の自立＞であると認めることができるだろうか。結論的に葉子が＜自覚にめざめかけて＞いる＜急進的な女性＞であると断言することはできない。葉子の男性中心社会に対する反抗的な行動は目的・理由のない無意識的な反抗心の発現であり、また、葉子の女性の自立への訴えには＜男と肩を並べる女性＞としての＜経済的な自立への念願＞が欠かれているからである。

葉子は、＜素直な本能＞の持ち主であり、＜目覚めかけても急進的でもない＞＜勝気な鋭敏な＞女である。その葉子は、特別ではない、一人の女として、人間として倉地を愛するようになる。どうしても愛するしかないから愛をするようになる。「自分でも知らない」「衝動の為に的もなく」「大きな力に引きずられて」「自覚なく迷い入って」きた本能の道に、当たり前のように置かれていた＜純真の愛＞を葉子は喜んで受け止める。その＜純真の愛＞は葉子にとっていったいどんなものであろうか。また、その愛をすることによって葉子はどうなるのだろうか。

V. 葉子の男：屈辱

「シカゴに行って半年か一年木村と連れ添う外はあるまいとも思った。然し木部の時でも二ヶ月とは同棲していなかったとも思った。倉地と離れては一日でもいられそうにはなかった。」(p. 186) 上の例文から、三人の男に対する葉子の感情を読み取ることができる。葉子にとって婚約者の木村は「連れ添う外はあるまい」男であり、元夫の木部は「二ヶ月とは同棲していなかった」男である。それに比べて、倉地は「離れては一日でもいられそうにはない」男である。その中で、「葉子には義理にも愛も恋も起り得ない木村」(p. 107)についてはここで言及しないことにする。葉子にとって＜結婚というもので自分を束縛の下で悩ませた男＞である木部と、＜純真の愛の対象の男＞である倉地を比較することによって、葉子の男に対する感情の実態を明瞭に見ることができると思う。その中で＜葉子の愛＞の姿も自然に出てくるだろう。

1. 侮辱の過去：木部

「その鋭い小さな目は依然として葉子を見守っていた。(中略)今は車内の人が申合わせて侮辱でもしているように葉子には思えた。(中略)痩せた木部の眼は、依然として葉子を見詰めている。何故木部はかほ

^⑥ 有島武郎研究会(編)(2010).『有島武郎辞典』勉誠出版. p. 323.

どまで自分を侮辱するのだろう。彼は今まで自分を女とあなどっている。小ぼけな才力を今でも頼んでいる。女よりも浅ましい情熱を鼻にかけて、今でも自分の運命に差出がましく立入ろうとしている。あの自信のない臆病な男に自分はさっき媚を見せようとしたのだ。そして彼れは自分がこれ程まで誇りを捨てて与えようとした特別の好意を蹴を反して退けたのだ。痩せた木部の小さな眼は依然として葉子を見つめていた。」(p. 21~p. 22) 葉子が木部との結婚から逃げてきた以来、初めて二人は電車の中で再会するようになった。葉子は古藤と一緒にアメリカへ行く船の切符をもらうため、新橋から横浜に行こうとしていた。

葉子は木部からの激しい<侮辱>を感じながら、木部の視線から離れられない自分を意識しなくてはならない。その理由として、葉子は「自分はさっき媚を見せようとした」のが、木部は自分の「特別の好意を蹴を反して退けた」といっている。しかし、これは葉子の一方的な感情で、実際に木部が葉子の好意を無視して葉子を侮辱しようとしていたのかは疑問である。「親しい媚の色を浮かべながら、(中略)稲妻のように彼女の心に響いたのは、男がその好意に応じて微笑みかわす様子がないと云う事だった。実際男の一字眉は深くひそんで、その両眼は一際鋭さを増して見えた。」(p. 12) これは葉子の直覚みたいなものの判断ではあったと思われる。木部が実際に葉子をどんな視線でみていたのかは明瞭でないが、葉子が木部に激しい<侮辱>を感じていることは事実である。木部との結婚から逃げてきた理由を葉子はこういっている。

「自分もあんな事を想いあんな事を云うのかと思うと、葉子の自尊心は思う存分に傷つけられた。外の原因もある。然しこれだけで十分だった。」(p. 19) 葉子は、日清戦争の時、天才の従軍記者として活躍した木部から自分の姿を発見して好奇心を持ち、結婚後には木部の裏面に失望して、その姿を自分だと思うことに自尊心を傷つけられた。自尊心を傷つけられることは、葉子にとって耐えられない十分な理由であった。それで、葉子は木部との結婚から逃げる方法を取るが、木部の妻として一度隷属せしめられた記憶は、葉子にとって屈服することの出来ない<侮辱>になる。

『或る女』のなかで、<侮辱>という言葉は、葉子が<木部との過去>に対して感じる感情として使われている。上の例文以外に<侮辱>の言葉が出ている例文を挙げてみたい。「田川夫人という人は上流の貴夫人だと自分でも思っているらしいに似合わない思いやりのない人だと思い出した。それはあり内の質問だったかも知れない。けれども葉子にはそう思えた。縁もゆかりもない人の前で思うままな侮辱を加えられるとむっとせずにはいられなかった。知った所が何んにもならない話を、木部の事まで根ほり葉ほり問いただして一体何にしようという気なのだろう。(中略)「老人には過去を、若い人には未来を」という交際術の初歩すら心得ないがさつな人だ。自分ですらそっと手もつけないで済ませたい血なまぐさい身の上を……」(p. 122~p. 123) 横浜から出発してアメリカに向かう絵島号には田川夫妻も一緒に乗っていた。田川夫人は絵島号のなかで葉子と対立している人物であり、後に葉子と倉地の関係を新聞に知らせたのもこの人である。しかし、今、葉子を<侮辱>しているのは田川夫人なのだろうか。それは違う。「それはあり内の質問だったかも知れない。けれども葉子にはそう思えた。」葉子と田川夫人との関係がこれから悪化していくことは明確な事実であるが、今の状態で田川夫人の挨拶みたいな質問のなかに葉子に<侮辱>を加えたいという意図はなかったと思われる。だが、葉子は思う存分に<侮辱>を感じている。「老人には過去を、若い人には未来を」という交際術の初歩すら心得ないがさつな人だ。自分ですらそっと手もつけないで済ませたい血なまぐさい身の上を……」の部分に注目してみたい。田川夫人の話の中で、葉子を<侮辱>していることは

田川夫人の言葉や行動ではなく、その言葉から思い出される葉子自身の〈過去、血なまぐさい身の上〉なのである。

〈過去〉はいつも葉子を〈侮辱〉する。その〈侮辱の過去〉は木部との関係から始まった。葉子は木部との結婚から逃げてきた後、母の親佐と仙台で生活したことがある。親佐は仙台支部長として基督教婦人同盟の運動を活発にし、仙台の有名人の一人になった。女性としての魅力とタクトを持っている葉子も自然に人たちの注目の対象になった。「突然小さな仙台市は雷にでも打たれたようにある朝の新聞記事に注意を向けた。それはその新聞の商売敵である或る社主であり主筆である某が、親佐と葉子との二人に同時に懇懃を通じているという、全紙に亙った不倫極る記事だった。誰れもが意外な顔をしながら心の中ではそれを信じようとした。」(p. 32~p. 33)

それは、有名性から生じた噂であった。「その青年は名を木村とって、日頃から快活な活動好きな人として知られた男で、その熱心な奔走の結果、翌日の新聞紙の広告欄には、二段抜きで知事令夫人以下十五名の貴婦人の連名で、早月親佐の冤罪が雪がれる事になった。この稀有な大袈裟な公告が又小さな仙台の市中をどよめき互らした。然し木村の熱心も口弁も葉子の名を広告の中に入れる事は出来なかった。」(p. 33) 木村の努力にも関わらず、葉子はこの噂からの冤罪を雪がれることができなかった。

それには理由がある。「あの時知事の奥さんはじめ母の方は何とかしようが娘の方は保証が出来ないと仰有ったんですとさ」(p. 43) 貴婦人たちが「娘のほうは保証出来ない」といったからである。仙台での葉子の行動に問題があったのだろうか。それは違う。仙台での葉子の姿は「葉子は(中略)不思議な程沈黙を守って、碌々晴れの座などには姿を現わさないでいた。(中略)葉子の控目なしおらしい様子」(p. 32)であった。けれども、この葉子の行動にはまた理由がある。「木部の友人等が葉子の不人情を怒って、(中略)社会から葬ってしまえとひしめいているのを葉子は聞き知っていたから、(中略)葉子は母と共に仙台に埋もれに行った。」(p. 31) 木部との離婚の後なので、葉子はできるだけ静かに生活したかったのである。

しかし、いざとなる時には、〈過去〉は葉子の前に当たり前のように表れた。貴婦人たちの判断は、葉子の〈過去〉から出たものであった。木部との関係から始まった葉子の〈侮辱の過去〉は、もう一つの屈服することのできない〈侮辱の過去〉を生み出してしまった。愛さなかった男、木部との過去は、葉子にとって侮辱そのものであった。

2. 屈辱の未来：倉地

葉子にとって倉地との愛は〈屈辱〉という言葉で表すことができる。「「事務長はあなたのお部屋にも遊びに見えますか」(中略)「いいえちっともお見えになりませんが……」(中略)「おやそう。私の方へは度々いらして困りますのよ」(中略)敵意—嫉妬とも云い代えられそうな—敵意がその瞬間からすっかり根を張った。」(p. 123~124)「屈辱、屈辱……屈辱—思索の壁は屈辱というちかちかと寒く光る色で一面に塗りつぶされていた。その表面に田川夫人や事務長や田川博士の姿が目まぐるしく音律に乗って動いた。(中

略) 皮肉な横目をつかって青味を帯びた田川夫人の顔が、かき乱された水の中を、小さな泡が逃げてでも行くように、ふらふらとゆらめきながら上の方に遠って行った。先ずよかったと思うと、事務長のinsolentな眼付きが低い調子の伴音となって、じっと動かない中にも力がある震動をしながら、葉子の眼睛の奥を網膜まで見透す程ぎゅっと見据えていた。」(p. 127) 絵島号のなかで、葉子を苦しませるのはいつも田川夫人与倉地とに関係があることであった。田川夫人との話の後、葉子は激しい感情の揺れと共に<屈辱>を感じる。しかし、ちかちかと寒く光る色で一面に塗りつぶされている<屈辱>の壁から、田川夫人の顔は上の方に遠ざかっていく。そこには「事務長のinsolentな眼付きが」「じっと動かない中にも力がある震動をしながら、葉子の眼睛の奥を網膜まで見透す程ぎゅっと見据えてい」る。

葉子が受けた<屈辱>はどこから起因された感情であろうか。葉子の<屈辱>の思索に最後に残ったのは倉地の<insolentな眼付き>である。その倉地の態度はいつも男たちの憧れの対象であった葉子にとっては耐えられないものであった。しかし、葉子は倉地のinsolentな態度にも関わらず、田川夫人との話のなかで、倉地に対する自分の感情—嫉妬—を分かってしまった。それは認めたくなくても、認めるしかない感情であり、葉子にとっては屈服するしかない<屈辱>であった。

「事務長だけは、一向動かされた様子が見えぬばかりか、どうかした拍子で顔を合せた時でも、その臆面のない、人を人とも思わぬような熟視は、却って葉子の視線をたじろがした。(中略) 葉子はそうした気分に従われて時々事務長の方に牽付けられるように視線を送ったが、その度毎に葉子の眸は脆くも手きびしく追い退けられた。」(p. 116) 葉子が倉地にどれだけ視線を送っても、葉子に返ってくるのは倉地の無関心な視線だけである。倉地は葉子の視線を露骨的に退けているが、葉子は牽き付ける力によりまた倉地に視線を送っている。

この場面を木部との場面と比較してみれば、葉子の二人の男に対する態度の違いが明白に見えてくる。「親しい媚の色を浮かべながら、(中略) 稲妻のように彼女の心に響いたのは、男がその好意に応じて微笑みかわす様子がないと云う事だった。実際男の一文字眉は深くひそんで、その両眼は一際鋭さを増して見えた。」(p. 12) 「何故木部はかほどまで自分を侮辱するのだろう。(中略) あの自信のない臆病な男に(中略) 特別の好意を蹴を反して退けたのだ。」(p. 22) 葉子は木部が自分の好意に応じて微笑みかわさないようだと思っただけで、木部から<侮辱>を感じた。葉子は木部に対する自分の好意を<特別な好意>といいながら、木部との関係の中では自分の存在を何よりも強調している。「自分もあんな事を想いあんな事を云うのかと思うと、葉子の自尊心は思う存分に傷つけられた。外の原因もある。然しこれだけで十分だった。」(p. 19) この例文からも分かるように、木部との関係の中で葉子にとって一番大切であったことは自分の自尊心である。自尊心を傷つけられることは葉子にとってどんな状況の中でも耐えられるものではなかった。

しかし、倉地との場面ではそういう葉子の態度を見ることはできない。逆に葉子の自尊心は踏みつけられているように見える。「珍しく受身になって」(p. 96) 「習慣的な男に対する反抗心は唯訳もなくひしがれて」(p. 152) 「事務長の前では、葉子は不思議にも自分の思っているのと丁度反対の動作をしていた。無条件的な服従という事も事務長に対してだけは唯望ましい事にばかり思えた。」(p. 164) 葉子は今までのすべての人間関係の中で、自分が勝利者の立場に立っているか、それができないとその場を逃げてしまう方法を取っていた。その葉子の姿は、母である親佐との関係でも、夫であった木部との関係でも同じように表れたも

のであった。しかし、倉地という存在の前で葉子は今までの自分らしくない特別な言動を取っている。

「葉子は恐ろしい崖の際から目茶苦茶に飛び込んでしまった。葉子の眼の前で今まで住んでいた世界ががらっと変ってしまった。木村がどうした。米国がどうした。養って行かなければならない妹や定子がどうした。今まで葉子を襲い続けていた不安はどうした。人に犯されまいと見構えていたその自尊心はどうした。そんなものは木葉微塵に無くなってしまっていた。倉地を得たらばどんな事でもする。どんな屈辱でも蜜と思おう。倉地を自分独りに得さえすれば……。今まで知らなかった、捕虜の受くる蜜より甘い屈辱！」(p. 165) 葉子は倉地に初めて抱きしめられた後、上の例文のように言っている。葉子は倉地を選択することによって犠牲しなければならないすべてのものを犠牲することの辱を当たり前のことのように思いながら、受け止めようとしている。この葉子の姿は、自分を拘束しているものから逃げてしまおうとする形にも見えるかも知れないが、葉子が自ら自分を一番強く拘束させていた自尊心を犠牲しようとしたことは今まで一度もなかったことである。葉子は倉地との愛が「朧ろげながら形を取って手に触れたように思った」(p. 173)時、自らをその愛の捕虜に化させ、屈服するしか外にどうすることもできない愛の強烈な力に＜屈辱＞を感じながらも、それを「蜜より甘い屈辱！」といい、受け止めようとしている。葉子は木部との関係から始まる＜侮辱の過去＞を後ろにして、自尊心が踏みつけられることに屈服するしか外はどうすることもできない倉地との＜屈辱の未来＞に向かって、恐れずに一步を踏み出した。

VI. 葉子の愛：死

「「葉子さん、葉子さんが悪ければ早月さんだ。早月さん……僕のすることはするだけの覚悟があつてするんですよ。僕はね、横浜以来あなたに惚れていたんだ。それが分らないあなたじゃないでしょう。暴力？暴力が何んだ。暴力は愚かな事だ。殺したくなれば殺しても進んぜるよ」葉子はその最後の言葉を聞くと瞑眩を感ずる程に有頂天になった。」(p. 183)「生れて以来、葉子は生に固着した不安からこれ程まで綺麗に遠ざかり得るものとは思ひも設けていなかった。しかもそれが空疎な平和ではない。飛び立って躍りたい程のecstasyを苦もなく押え得る強い力の潜んだ平和だった。」(p. 184)

葉子は、倉地に初めて抱きしめられた後、＜死＞に言及し始めるようになる。「殺すなら殺すがいい。殺されたっていい。(中略)こんな悲しいのを何故早く殺してはくれないのだ。この哀しみにいつまでも浸っていたい。早く死んでしまいたい。……」(p. 157)「この人を自分から離れさず位なら殺して見せる、そう葉子は咄嗟に思いつめて見たりした。」(p. 176)「どうにもなれ、殺すか死ぬかするのだ、そんな事を思えばかりだった。」(p. 177)「(中略)恨めしく恨めしく死」(中略)念が届かなければ……念が届かなければ……(中略)そうしたら美しく死のうねえ……」(p. 181~p. 182) 葉子の愛は、葉子に向かった倉地の行動によって、その形を表す。葉子の愛は屈辱を耐えるぐらいの次元をさらに超える、＜命と取り代えっこをする位＞までの強烈なものである。葉子の愛の感情は最後のほうまで果てしなく高まり、倉地を殺すか自

分が死ぬかどうにかして〈死〉という存在を招かれずにはいられなくなった。葉子は〈死〉という存在を利用して、今の強烈な感情を永遠のものにしたかったのであろう。

そんな状況のなか、倉地はとうとう葉子への愛を打ち明けることに至る。「殺したくなれば殺しても進んぜるよ」葉子は倉地のこの言葉から、自分の強烈な愛の力と同じぐらいの強烈な愛の力を倉地から感じることができる。この瞬間は、二人の愛が一つになる瞬間であった。葉子はその言葉を聞いて「瞑眩を感ずる程に有頂天になった」のである。葉子はもう死んでもいいことになった。〈命と取り代えっこ〉にしても自分のものにしたい倉地という愛の対象があり、その倉地は自分を「殺したくなれば殺しても進んぜるよ」といっている。葉子はもう〈死〉を恐れなくなった。恐れる必要がなくなった。今死んでもいいと思うぐらいに愛の充実した感情を持つようになった葉子にとって、〈死〉は人生の中でいつ襲ってくるか分からない恐ろしいものではなく、むしろ今この瞬間の〈倉地との愛〉を永遠なものにする唯一の方法なのである。〈死〉を喜んで受け止めることができる葉子は、〈死〉を恐れる〈生に固着した不安〉から綺麗に遠ざかるようになった。これは二人の愛の絶頂に相違ない。

1. 生の不安

絶頂の愛、愛する二人の間の完璧な愛ということは、瞬間の錯覚である。死んでもいい瞬間が過ぎて、葉子が〈倉地との愛〉を維持しながら生きようとする時、〈生の不安〉は色々な形に自分の姿を化して葉子を襲ってくるようになる。葉子が生きて行こうとすればするほど〈死〉はまた恐ろしいものになり、〈倉地との愛〉の完璧さも時間が過ぎれば過ぎるほど色褪せていくばかりであった。

「然し船がシャトルに着くという事は、葉子に外の不安を持ち来さずにはおかなかった。(中略) 倉地と離れては一日でもいられそうにはなかった。」(p. 186) 〈外の不安〉は何を意味するのだろうか。それは、葉子にとって倉地を失うことであろう。葉子は倉地なしでは「一日でもいられそうには」ない、一日でも生きられなくなった。〈倉地との愛〉は、葉子に〈生の不安〉から綺麗に遠ざかる一瞬を与えたが、その瞬間が過ぎた後には倉地との愛がそのまま〈生の不安〉になって葉子に迫ってくる。葉子は強烈な愛をすることによって、強烈なく生への念願を持つようになる。

「○某大汽船会社船中の大怪事／事務長と婦人船客との道ならぬ恋—／船客は木部孤筈の先妻」(p. 248) 葉子は絵島号に乗ったまま、倉地と一緒に日本に帰ることになる。しかし、二人の愛の未来には社会からの完全な埋葬という恐ろしい現実が準備されていた。それは田川婦人の仕業であり、帰国日の翌日に載せられた新聞記事によって、二人は早くも逃避生活をせざるをえなくなってしまった。こんな状況のなか、葉子はもう一つの不安を抱えていなければならない。

「宿屋きめずに草鞋を脱ぐ」(p. 218) 葉子の〈屈辱〉から始まった倉地との愛。絵島号に乗っていたときの倉地の妻子の存在に対する葉子の不安は、日本に帰ってきてからもっと深まる一方であった。「倉地の妻(中略)。葉子はそれが優れた人であると聞かれれば聞かれる程妬ましさを増すのだった。」(p. 28

8) 「倉地が去った人達に未練を残すようならば自分の恋は石や瓦と同様だ。」(p. 289~p. 290) 社会から埋葬された状況のなか、葉子に残っていることは倉地との愛だけである。倉地の愛を失うことは葉子の生自体を脅かすものである。その愛を倉地の妻子によって脅かされながら、葉子は倉地との愛を確認するためにもがきつづける。

「二人の幸福は何処に絶頂があるのか判らなかった。二人だけの世界は完全だった。(中略)「然し倉地は妻や娘達をどうするのだろう」こんな事をそんな幸福の最中にも葉子は考えない事もなかった。(中略)「この幸福の絶頂が今だと誰れか教えてくれる人があったら、私はその瞬間に喜んで死ぬ。こんな幸福を見てから下り坂にまで生きているのはいやだ。それにしてもこんな幸福でさえが何時かは下り坂になる時があるのだろうか」(p. 291~p. 292)

社会からの埋葬による不安、倉地の妻子の存在からの不安。その不安は愛への不安、生への不安に繋がっていく。葉子にとって、二人だけの世界での幸福はもう完全な幸福ではない。どうしても消せない不安が絡まっている幸福を幸福といえるだろうか。愛の絶頂、それによる幸福の絶頂、それがもう過ぎてしまったことは葉子自身が一番実感しているのであろう。しかし、もう下り坂になっている愛を、葉子はどうかして掴もうとする。「幸福の絶頂(中略)喜んで死ぬ。」と愛の絶頂の時に招いた<死>のことに言及しながら、変わっていく自分の愛をどうかして元の形のままにして置こうとしたがる。

「俺れには女はお前一人より無いんだからな。離縁状は横浜の土を踏むと一緒に嬪に向けてぶっ飛ばしてあるんだ」(p. 315) 葉子を苦しめた倉地の妻子のことが解決された。社会からの埋葬という結果にもかかわらず、倉地の葉子に対する愛は変化していないように見える。しかし、葉子の不安は消えられない。「夜となく昼となく思い悩みぬいた事が既に解決されたので、葉子は喜んで喜んでも喜び足りないように思った。自分の倉地と同様に胸の中がすっきりすべき筈だった。けれどもそうは行かなかった。葉子はいつの間にか去られた倉地の妻その人のような淋しい悲しい自分になっているのを発見した。」(p. 316) 自分を苦しめた倉地の妻子のことが解決されたのにもかかわらず、葉子はその事実からもっと不安を感じる。倉地の妻子が倉地に捨てられたように、自分もいつか倉地に捨てられるのではないかという不安、倉地との愛から追い出されるかも知れないという不安を葉子は感じざるを得なくなった。

「唯自分の心が幸福に淋しさに燃え爛れているのを知っていた。唯このままで永遠は過ぎよかし。唯このままで眠りのような死の淵に陥れよかし。とうとう倉地の心と全く溶け合った自分の心を見出した時、葉子の魂の願は生きようという事よりも死のうと云う事だった。」(p. 317) 倉地の決定から、葉子は幸福感と淋しさを同時に感じながら、倉地と同じように素直に喜ぶことができない。これは、二人の心がもう完全に溶け合っていないことを意味する。葉子はそのことにもう気づいているが、<死>に言及しながら自分の愛の変わりを否定している。喜んで<死>を招いた愛の絶頂を思い出しながら。倉地の妻子という確かな存在がいなくなったのにもかかわらず消せない不安。葉子の愛は、その漠然たる不安に飲み込まれていく。

<死>を喜んで招くことができた葉子の<純真の愛>は、絶頂を過ぎてから変わりつつある。自分の凡てを投げ出して得られた倉地との純真の愛の没落は、葉子にとって<死>を意味する。絶頂を過ぎ、いつ来るか分からない愛の終わりは、生の中でいつ来るか分からない<死>と同じようなものとして葉子に迫ってくる。愛の終わり、死への恐れは自然に<生への執着>を招くようになる。

「宿屋きめずに草鞋を脱ぐ」(p. 218) 船の中から持っていた葉子のこの考えは、倉地の妻子のことが解決された後にも、消せない不安と一緒にずっと葉子の中に残っている。「宿屋きめずに草鞋を脱ぐ馬鹿をしない必要はもうない、倉地の愛は確かに自分の手に握り得たから。然し口にこそ出しはしないが、倉地は金の上では可なり苦しんでいるに違いない。」(p. 337) 「よしそれで話は分った。木村……木村からも搾り上げろ、構うものかい。人間並みに見られない俺れ達が人間並みに振舞っていてたまるか。葉ちゃん……命」「命！……命！！命！！！」(p. 369) 葉子は木村にお金をもらうための手紙を書いた。木村という存在を確保することによって消せない不安を減らそうとしたのだろう。愛をしながら生きていくことによる罪悪。しかし、木村にお金をもらうことは、愛するためであるより、生きるためのものである。〈生への執着〉により葉子は〈倉地との愛〉以外の罪をまた犯すようになる。

絶頂が過ぎた愛の後には、いつ来るか分からない〈死〉だけが残されていた。「自分の恋には絶頂があってはならない。(中略)自分の眼には絶頂のない絶頂ばかりが見えていたい。」(p. 372) しかし、葉子は〈生の不安〉を完全に消す、〈死〉を自ら招く愛の絶頂が過ぎたのを知っていながらも、自分の愛には「絶頂のない絶頂」だけがあることをひたすら望んでいる。幸福の絶頂で喜んで死ぬといった葉子、愛の絶頂で死にたいといった葉子。しかし、実は「自分の恋には絶頂があってはならない」という葉子はどうにかしてでも生きて行きたがる人なのである。愛しても死ぬ、愛しなくても死ぬ、どうしても〈死〉という存在と離れられない絶対的な本能の愛の力の中で、ひたすら生きてがる人が葉子なのである。

2. 病による死

「噂さにもお聞きとは存じますが、私は見事に社会的に殺されてしまいました。(中略)けれども親類、縁者、友達にまで突き放されて、二人の妹を抱えて見ますと、私は眼もくらんで仕舞います。(中略)唯今除夜の鐘が鳴ります。大晦日の夜 木村様」葉子はそれを日本風の状袋に収めて、手筆で器用に表記を書いた。(中略)我れにもなく冷やかな微笑が口尻をかすかに引きつらした。(中略)人の生きているというのが恐ろしい程不思議に思われ出した。」(p. 339~p. 340)

葉子は木村に手紙を書いた。葉子にとって、愛以外の〈生死の条件〉が備えられようとする時、今まで水面の下でちょいちょい自分の姿を見せていた〈病〉というものが、本格的にその存在感を表し始める。「航海の初期に於ける批点の打ち処のないような健康の意識はその後葉子にはもう帰って来なかった。寒気が募るにつれて下腹部が鈍痛を覚えるばかりでなく、腰の後ろの方に冷たい石でも釣り下げたような、重苦しい気分を感じずようになった。日本に帰ってから足の冷え出すのも知った。(中略)肩の凝るのは幼少の時から固執だったがそれが近頃になって殊更ら激しくなった。葉子はちょいちょい按摩を呼んだりした。腹部の痛みが月経と関係があるのを気付いて、葉子は婦人病であるに相違ないと思った。(中略)一月の末になって木村からは果して金を送って来た。」(p. 344~p. 345) 今までの葉子の考えが実現される時、何かが始まるようになった。

古藤はこういっている。「その時は木村の外には保護者はいなかったから、あなたとしてはお妹さん達を育てて行く上にも自分の犠牲にして木村に行く気でお出でだったかも知れませんが何故……何故今になっても木村との関係をそのままにしておく必要があるんです」(p. 383)「葉子さん頼みます、木村を救って下さい。そしてあなた自身を救って下さい。(中略)あなたは自分でもあざむけないようなものを持って居られるのを感じないように思うんです。境遇が悪いんだ屹度。」(p. 385) 古藤は葉子の何を非難し、何を庇っているのだろうか。古藤の葉子に対する感情は矛盾のように見えるけれど、その視線が判断であることは確かなことであろう。葉子への判断の視線、病はどんどん葉子に迫って来る。純真性を失った葉子の愛を、また愛をしながら生きようとする葉子を、罰しようとするように。

<病>というものはいつから葉子に巻き付いていたのだろうか。「その看板の一つに、長い黒髪を下げた姫が経巻を持っているのがあった。その胸に書かれた「中将湯」という文字を、何気なしに一字ずつ読み下すと、彼女は突然私生児の定子の事を思い出した。」(p. 24) 葉子がアメリカ行きの船の切符をもらいに横浜に向かうときの場面である。「中将湯」は、津村順天堂から発売された婦人病の専門薬で、葉子はずっと前から自分の体のことを気にしていたようである。「葉子は実際可なり長い以前から子宮を害しているらしかった。腰を冷やしたり、感情が激昂したりした後では、きつと収縮するような痛みを下腹部に感じていた。(中略)近頃は又段々痛みが激しくなるようになって来ていた。半身が麻痺したり、頭が急にぼーっと遠くなる事も珍しくなかった。葉子は寢床に這入ってから、軽い疼みのある所をそっと平手で擦りながら、船がシヤトルの波止場に着く時の有様を想像して見た。」(p. 192) 絵島号の中、葉子は倉地との愛を確認した後、木村を仮病でごまかして倉地と一緒に日本に戻ろうとする。ここで、<病>は初めて確かな形で自分の姿を現した。しかし、その時の<病>は、まだ仮病という言葉でいえるぐらいの状態、葉子の生を脅かすぐらいのものではなかった。

日本に戻ってから、葉子の周りの状況は激変する。「どうしてこれほどまでに自分というものの落着き所を見失ってしまったのだろう。そう思う下から、こうしては一刻もいられない。」(p. 289)「段々募って来るような腰の痛み。肩の凝り。そんなものさえ葉子の心をますます焦立たせた。」(p. 290)「然し倉地は妻や娘達をどうするのだろう」(p. 291) 葉子は現実の世界と向き合わなければならなくなった。船の上で木村をごまかすために、仮病として用いた<病>もますます募るばかりであり、葉子の焦りを促す。愛だけでは生きられない現実の世界では、仮病はもう仮病ではない、実際の<病>として葉子の生を脅かすようになる。

「命！……命！！命！！！」(p. 369) 日本の海上の要塞地の様子・情報を集め、それを外国人に売ることによって葉子との生活を営むようになった倉地。愛しない木村を騙し、お金をもらうようになった葉子。二人が愛するために歩いてきた愛の道は、もう生きるために必死にもがかなければならない出口のない真暗な生死の道になってしまった。その中で葉子の<病>は募るばかりである。「倉地は益々荒んで行った。(中略)葉子も自分の健康が段々悪い方に向いて行くのを意識しないではいられなくなった。」(p. 390)「葉子は不快極る病理的の憂鬱に襲われた。静かに鈍く生命を脅かす腰部の痛み、二匹の小魔が肉と骨との間に這入り込んで、肉を肩にあてて骨を踏んばって、うんと力任せに反り上るかと思われる程の肩の凝り、(中略)激しく動き出す不規則な心臓の動作、(中略)頭脳の狂い、……こう云う現象は日一日と生命に対する、そし

て人生に対する葉子の猜疑を激しくした。」(p. 391) 何事までして、どれだけ自分を墮落の道に置かせても、愛をしながら生きようとする葉子は、悪化していく〈病〉の力の前で、生への疑いを持たずにはいられなくなってしまう。

こんな状況のなか、葉子の愛にも大きな変化が起こるようになる。「もう私に愛想が尽きたら尽きたとはっきり云って下さい、ね。あなたは確かに冷淡におなりね。(中略) さあ云って下さい、……今……この場で、はっきり……でも死ねと仰有い、殺すと仰有い。私は喜んで……私はどんなにうれしいか知れないのに。(中略)」(p. 408) 「ええ、殺すなら殺して下さい……下さいとも」(p. 409) 「馬鹿が……静かに物を云えば判る事だに……俺れがお前を見捨てるか見捨てないか……静かに考えても見ろ、馬鹿が……恥曝しな真似をしやがって……顔を洗って出直して来い」(p. 410) 愛の変わりの焦燥によって不安になった葉子はく愛して下さい、愛していると云って下さい、強烈な愛の力で殺したいくらいに愛していると云って下さい」と倉地に縋り付く。しかし、「殺したくなれば殺しても進んぜるよ」(p. 183)とってくれた倉地はもういない。完全に変わってしまった愛、二人の愛は終わってしまった。

倉地との愛を失った後、葉子は死を考えざるを得なくなる。「もう自分はこの世の中に何の用がある。死にさえすればそれで事は済むのだ。この上自身も苦しみたくない。他人も苦しめたくない。」(中略) 同時に倉地が何所かで生きているのを考えると、忽ち燕返しに死から生の方へ、苦しい煩惱の生の方へ激しく執着して行った。倉地の生きてる間に死んでなるものか……それは死よりも強い誘惑だった。」(p. 517) しかし、葉子はまた生きようとする。愛ではない、倉地に対する執着の感情を愛の代わりに持ちつつ、それでも生きようとする。葉子は今まで延ばしてばかりであった、自分の病の手術をすることを決める。

「愈葉子が手術を受けるべき前の日が来た。(中略) 子宮後屈症と診断された時、買って帰って読んだ浩瀚な医書によって見ても、その手術は割合に簡単なものであるのを知り抜いていたから、その事については割合に安々とした心持ちでいる事が出来た。唯名状し難い焦燥と悲哀とはどう片付けようもなかった。」p. 529 「葉子はまだ立ち上ろうとした。自分の病気が癒え切ったその時を見ているがいい。どうして倉地をもう一度自分のものに仕遂せるか、それを見ているがいい。」(p. 530) 葉子は手術をして生きて行こうとする。しかし、倉地との愛の絶頂で葉子が自ら喜んで招いた死は、生きようとする葉子の周りでしつこくも離れない。病室のなかで葉子は死への恐怖と戦わなければならない。「若し手術の結果、子宮底に穿孔が出来ようになって腹膜炎を起したら、命の助かるべき見込みはないのだ。(中略) 死のうとする時はとうとう葉子には来ないで、思いもかけず死ぬ時が来たんだ。」(p. 532~p. 533) 「間違っていた……こう世の中を歩いて来るんじゃない。」(p. 534) 死への予感、葉子は後悔する。しかし、葉子は自分の人生のなかの何を後悔しているのだろうか。倉地を愛したこと？ 愛しながら生きようとしたこと？ その過程のなかで罪を犯したこと？ とにかく葉子は後悔している。間違っていたと言いながら。

葉子は手術の麻酔を掛けられながら、叫び続ける。「倉地が生きている間—死ぬものか、……どうしてももう一度その胸に……やめて下さい。狂気で死ぬとも殺されたくはない。やめて……人殺し」(p. 551) 葉子はく病〉による死への恐怖の前で、今まで歩いて来た人生の道を後悔するが、倉地との愛も、自分の生も否定してはいない。罰するように迫って来る死への道にずっと抵抗しながら、また愛したがっている、また生きたがっている。葉子がく病〉による死に抵抗すればするほど、その愛も、その生も、確かな形として表

れてくる。しかし、葉子の抵抗にもかかわらず、死は襲ってくる。

「どンドン熱が上り出して、それと共に激しい下腹部の疼痛が襲って来た。子宮底穿孔?!」(p. 551)
 「逆も助からない」(中略) そうなって見ると、一番強い望みはもう一度倉地に会って唯一眼その顔を見たいという事だった。」(p. 554) 「「痛い痛い痛い……痛い」葉子が前後を忘れ我れを忘れて、魂を搾り出すようにこう呻く悲しげな叫び声は、大雨の後の晴れやかな夏の朝の空気をかき乱して、惨ましく聞え続けた。」(p. 556) 死の前で、葉子は倉地のことを思い出す。二人の愛は終わり、葉子の倉地に対する純真の愛は執着と同じような形になってしまったが、葉子は最後の最後まで倉地に会いたがっている。この葉子の姿を見ると、倉地との愛が葉子にとっては本当の愛であることを否定することはできないだろう。

葉子は、今まで歩いて来た道を判断でもするように迫ってきた<病>によって、苦しみながら死んでいく。その葉子の苦痛の死によって葉子の生の叫びは否定されたが、命と取り代えっこする位の愛、倉地との愛は肯定されるようになった。しかし、葉子の生への叫びが意味がないといえるだろうか。それは違うと思う。葉子の生への叫びがどれだけ惨めで、醜かったとしても、それによって、ただ、葉子の愛だけが残るのではなく、葉子が葉子としての存在で残れるようになった。最後まで運命の傀儡になることに抵抗し続けた葉子は、最後の最後まで葉子らしかったと思う。

VII. おわりに

『或る女』の製作の動機として考えられている記述をあげてみたいと思う。「彼女は其父母に謀る事なく、其の師に告ぐことなく、社会の賓斥朋輩の讒謗我が道の将来の運命をだに顧る事なく、其の愛したる人と直ちに肉の交りをなせり。嗚呼、何ぞ其の心の憐れにして其の事の美なるや。かくて彼女は、其の夢みし処の実現せるを以って、之を凡ての苦痛讒謗に更へて驚かざりき。」「無情なる世を嘲り返したる彼女は、羨むに堪へたらずや。」これは、1908(明治41)年、有島武郎が瀬川末(せがわ・すえ)と再会した日の「観想録」の内容である^⑦。有島武郎が遠友夜学校に出向いた時に知り合った生徒である彼女は、その時、正式に結婚もしていないまま、3歳になる女児の母親になっていた。それから5年後、彼女は自殺する^⑧。また、『或る女』の内容の中にも、次のような記述がある。有島武郎の分身だと思われる古藤の言葉である。「明白に云うと僕はああ云う人は一番嫌いだけれども、同時に又一番牽き付けられる、僕はこの矛盾を解きほごして見たくって堪らない。」(p. 205) ああ云う人とは葉子のことであるが、有島武郎にとっては葉子の実際のモデルである佐々城信子と上の瀬川末のような女性を意味するのだろう。

^⑦ 竹腰幸夫(1986). 『或る女』論—母、葉子、愛子をめぐって— 日本文学研究資料刊行会(編) 『有島武郎 日本文学研究資料叢書』(p. 30) 有精堂出版株式会社.

^⑧ 有島武郎研究会(編)(2010). 『有島武郎辞典』勉誠出版. p. 334~p. 335.

彼女たちは、非社会的な愛の仕方をしてきた人たちである。親に背を向け、師に背を向け、社会に背を向け、ただ自分の愛をした彼女たち。有島武郎は彼女たちの愛し方に違和感を感じながらも、どうしても憧れの心を持たずにはいられなかったのだろう。実際に有島武郎は1907(明治40)年29歳の時、父の反対によって、当時愛していた河野信子との結婚が叶えられなかった経験を持っている。有島武郎は、その衝撃と悲しみから身を守るために遠く札幌に逃げてきたのだと、自分の「観想録」に書いている。父という壁にぶつかって、逃げることしかできなかつた有島武郎にとって、そんな大きな存在を見ようとししないで、ただ愛をした彼女たちの不思議な姿は、驚くべき光景であったのだろう。有島武郎はそういう彼女たちに対する自分の矛盾を解くため、『或る女』のなかで、非社会的な姿勢を取りながらも求めるしか術のないく絶対的な理想の愛を、葉子という人物を通して描こうとしたのだと思われる。

しかし、命と取り換えっこするぐらいの愛、その愛をした葉子は<苦痛の死>という惨めな結末に向かうようになった。有島武郎が描きたかつた<理想の愛>は、自己自滅を招くようなものなのであろうか。有島武郎の<理想の愛>、その姿を確実に見るために、評論の『惜しみなく愛は奪う』^⑨の内容を挙げてみたいと思う。

「愛は自己への獲得である。愛は惜しみなく奪うものだ。」(p. 377) 自己への獲得、有島武郎にとって愛は自分のすべてをあげるものではなく、相手のすべてを奪うものである。愛する相手から奪って、奪って、相手を自分のものにする、だから愛は自己への獲得なのである。もし、二人がお互いの全部を奪い合って自己への獲得にすることができれば、相手のすべてをそれぞれ自分のものとした二人は、もう二人ではない、一人になる。それが愛への理想である。しかし、現実的にそういう愛が可能なのだろうか。完全に二人の心が一つになる、完全に同じように相手を自分のものにする、一瞬に相手になること、そういう瞬間はあるのだろうか。それは、瞬間の錯覚ではないだろうか。その瞬間の錯覚を永遠のものにするためには、死を招くしかない。

ここまでの有島武郎が『或る女』の前編で描いた葉子の愛の姿である。葉子は倉地との愛の絶頂で自ら喜んで死を招いた。しかし、葉子は死ぬことなく、二人の愛の変わり、愛の下り坂の苦しみを感じながら、自分の愛をして行く。死を喜んで招いた、生の不安がまったくなくなった倉地との愛の絶頂が過ぎ、葉子は、そこから来る生の不安に脅かされた。しかし、それでも、葉子は絶頂のない、死ぬ必要のない愛を望みながら、倉地を愛し続ける。自分の精神が崩れるぐらいに愛し続ける。二人の愛が終わった後にも、葉子は自分の愛をして行く。

有島武郎は、二人が一人になるものだけが愛への理想とは言っていない。「然し二人の愛が互いに完全に奪い合わないでいる場合でも、若し私の愛が強烈に働くことが出来れば、私の成長は益々拡張する。そして或る世界が—時間と空間をさえ撥無するほどの拡がりを持った或る世界が—個性の中にしっかり建立される。そしてその世界の持つ飽くことなき拡充性が、これまでの私の習慣を破り、生活を変え、遂には弱い、はか

^⑨ 有島武郎 (1971). 「惜しみなく愛は奪う」『有島武郎集 新潮日本文学9』新潮社. 以下同じ文献からの引用。 : 「惜しみなく愛は奪う」は、1917(大正6)年、初稿の形で『新潮』雑誌に載せられた。その後、1920(大正9)年、今の形で有島武郎著作集第十一輯『惜しみなく愛は奪う』として刊行された。

ない私の肉体を打壊するのだ。破裂させてしまうのだ。」(p. 379) 一人でも強烈に愛することができれば、それによって自己への獲得は可能であると言っている。愛することによって、相手を自分のものに獲得し得続けたら、その成長により、はかない人間の肉体は破壊してしまう、破裂するようになる。実際、『或る女』の後編では、愛することによって、自分を失っていく葉子の姿が具体的に描かれている。相手を奪って自分のものに獲得すれば、限定されている肉体の中に元々あった自分という存在は失われていくのが当然のことであろう。

しかし、その結果、死に至ることを、自滅ではないと有島武郎は言っている。「愛が完うせられた時に死ぬ、即ち個性がその拡充性をなし遂げてなお余りある時に肉体を破る、それを定命の死といわないで何処に正しい定命の死があろう。愛したものの死ほど心安い潔い死はない。その他の死は凡て苦痛だ。」(p. 380) 愛することによって、人生の中でただひたすら待たなければならぬ<死>を能動的に招くこと、それが有島武郎の愛の最終的な理想なのである^⑩。実際、有島武郎は『婦人公論』の記者である人妻の波多野秋子と心中することによって自分の愛の理想を遂げた。自分の死で、自分の理想を完成したのである。

有島武郎はこういう記述を残した。「私は僅かばかりの小説と戯曲とを書いたものであるが、そのささやかなる経験からいっても、表現手段として散文がいかに幼稚なものであるかを感じないではいられない。私の個性が表現せられるために、私は自分ながらもどかしい程の廻り道をしなければならぬ。」(p. 389)^⑪ 結果的に、有島武郎は自分の愛の理想を、『或る女』の葉子の愛を通じて描くことには失敗したのではないかと思う。葉子は愛することで、自ら死を招こうとしながらも、絶対に死のうとはしなかった。葉子は、最後の最後まで生きるために、もがき続けた。病により苦しく死んでいった葉子、生きてがりながら死んでいく葉子の死はそのまま苦痛の死であった。有島武郎は、どうしても死なない葉子に、生きてがるけど襲ってくる、病による苦痛の死を罰として与えて、絶対的な愛をすることによって能動的に招く死の美しさを強調したかったのかも知れない。

しかし、私は有島武郎が言いたがっていたもの以外のものを『或る女』の葉子を通じて見ることができた。有島武郎は「人間は人間だ。野獣ではない。天使でもない。(中略)人間によって切り取られた本能—それを人は一般に愛と呼ばないだろうか。」(p. 371)と言った。しかし、<愛>が人間の特別な本能であるのだろうか。葉子は<生>、次に<愛>が人間の本能だといっていたのではないだろうか。

葉子は、どうすることもできない本能の強烈な力に引かれ、倉地との愛をした。葉子はその愛の絶頂で喜んで死を招いたが、本当に死ぬことを望んでいたわけではない。逆に、生きていくことによって強烈な愛を

^⑩ 「「黒い影」が去ったあと、ただ独りのこされたAは、「この力を一点に吸ひ集める磁石のやうな美しい力が、早く私を救ひに来てくれ」と叫ぶ。「この力」とは自滅の死を積極的な死に転化することを求める力である。死がやってくるのをいたずらに待つのではなく、みずから死へ向かって突き進むことを、有島は願う。」遠藤祐 (1989). 有島武郎と死『国文学解釈と鑑賞』54(2), p. 61. : 遠藤(1989)は、有島武郎の最後の作品である『独断者の会話』を主に用いて、有島武郎の死について論じている。この有島武郎の思想は、『或る女』を通じても見るができる。

^⑪ 「惜しみなく愛は奪う」の初稿では、小説と戯曲に関することは言及されていない。ここでの「小説」は「惜しみなく愛は奪う」が完成された1920(大正9)年、その1年前に書かれた『或る女』のことを示しているのだと推測することができる。

し、喜んで死を招くことができる、その瞬間の生の満たされた感覚を満喫していた。

葉子は、ただ愛をしながら生きようとした。有島武郎は、本能的な愛の強烈な力を利用して死を招こうとした^⑩。また、その死に自ら向かって行くことは、愛が完成されたままの完璧なものになることを意味する。しかし、葉子は死のために愛を利用しようとも、愛のために死を利用しようとしなかった。葉子は何の目的もなく愛をし、襲ってくる死の前で必死に生きようとした。葉子にとって、愛をすることと、生きて行くことは矛盾のものではなかった。葉子は葉子らしく、その姿がどれくらい惨めでも、醜くても、愛をしながら生きようとした。私は、その葉子から、逆らいたくても逆らうことのできない〈生への念願〉という絶対的な本能を見ることができた。

有島武郎は、愛をすることによって能動的に招く死を通じて、運命の傀儡になることを拒もうとした。葉子は、襲ってくる死の前で生きようとすることで、運命の傀儡になることを拒もうとした。有島武郎が自分の信念を自分なりの方法で遂げたのと同じように、葉子も、襲ってくる死の前で生への念願を叫ぶことで自分という存在を残らせた。私は、生への念願を叫ぶ葉子の姿から、野獣でもない、天使でもない、一人の人間を見た。生きるために、惨めに、醜く、もがき続ける葉子の姿から、生命力の強さと絶対さを見た。

『或る女』の中には、有島武郎がいて、また早月葉子がいた。二人はまったく同じことを言っているように見えたが、実は違うことを言っていた。しかし、二人が言っていることが『或る女』のなかに混ざっていたからこそ、葉子の激しい、また強烈な人生が立体的に描かれたのではないかと思う。作者の有島武郎が自分の意図を葉子を通じて完全に反映することができなかつた結果、葉子が葉子という人物としてはっきりと現れて来たことは、面白いアイロニー^⑪ではないだろうか。

^⑩ 「死を自己の所有として〈奪う〉ことを、求めたのである。ただ、その希求を具現するためには、やはり何かの、自己以外の誰かの「力」が必要であった。死をも〈奪う〉ことができる程、おのれの生命を燃え上がらせてくれる〈愛〉の対象がなければならなかつたのである。(中略)有島にはその対象、「磁石のやうな美しい力」として、波多野秋子の面影が想い浮かべられていたに違いない。」 遠藤祐 (1989). 有島武郎と死『国文学解釈と鑑賞』54(2)、p. 61.

^⑪ 「野島秀勝が論じているように、たしかに「自らの創造運動の必然に導かれながら、そこにこそ真の〈生命〉があり〈人生の可能〉があると信じて行きついたところに、それを全的に否定する虚無を見出すという『或る女』創作のアイロニーは確かに人生そのものの耐え難いアイロニーとして作者を圧倒したに違いない」と思う。」石丸晶子 (1986). 『或る女』論、日本文学研究資料刊行会 (編) 『有島武郎、日本文学研究資料叢書』 (p. 11~p. 12) 有精堂出版株式会社. : 石丸 (1986) の結論の部分である。同じ〈アイロニー〉という言葉を使っているが、葉子から生命力の強さと絶対さを見たという私の結論とは違うことをいっている。

後書き

2007年の大学2年生の時、日本文学の授業で有島武郎の『或る女』を初めて読んだ。5～6人が一つのグループになって一つの作品でレポートを書き、発表をする授業だった。作品を選ぶことはできなく、順序通りだったか、くじびきだったかと覚えている。黒板に書いてあるいくつかの作品を見ても、読んだことのあるものは一つもなかったの、私には何でもよかった。しかし、『或る女』というタイトルがなんとなく気になったので、うちのグループの作品が『或る女』と決められた時には、ちょっとした嬉しさを感じた。翻訳書で読んだけど結構時間がかかった。葉子の強烈な愛、そして精神の乱れ、病による死、私はショックを受けた。

レポートの主題は<葉子は被害者であるか、加害者であるか>、たぶんこんなものだった記憶がある。私は葉子を判断の対象にすること自体に拒否感を持っていた。とにかく私は葉子を非難したくなかった。しかし、葉子を庇うこともできない。葉子は世間で言っているいい女とは完全に離れている存在であるからだ。そう考えている自分から、私はまた嫌な気持ちを感じた。グループのレポートは『或る女』の内容の整理に留まった。その後も私は作者の有島武郎と『或る女』の葉子を忘れることができなかった。

私はなぜ葉子に惹かれたのか。精神を狂わせる、体を破壊させる、死に向わせる、絶対的な愛、それに私は惹かれたのか。私は自分の考えをはっきりさせたくなくなった。しかし、もやもやする感情だけでは説明ができない。葉子を非難しているような、庇っているような、曖昧な態度を取っている作者の有島武郎の存在を意識しないで、葉子の愛、または葉子を理解することはできないと思った。

有島武郎の視線から葉子を見ることは、私の視線をはっきりさせる作業でもあった。私がある島武郎の思想全部を理解することはできないと思った。しかし、有島武郎の死、その死に方は、葉子の死に方とは真逆のものであり、何らかの関係がないわけではないと確信した。有島武郎の愛と死、葉子の愛と死、その二つのもの間で、私は自分がどんなものに惹かれたのかをはっきり見ることができた。

二人は、愛をした人たちであった。その愛は、外からはどう見えたか分からないが、自分には強烈な愛であったことに疑問を持つものではなかったと思う。その二人の愛の強烈さに、私は確かに惹かれた。しかし、愛することによって死に向かっていく有島武郎より、愛をしながらも生きようとする葉子に、私はもっと惹かれた。

『或る女』の中で、強烈な愛をすることは、死に向かって行くことになっていた。愛の完璧さを維持するためには死を招くしかない。しかし、人生の中で、何ものに対しても完璧さだけを求めたら、生の可能は、その真の意味を失ってしまうと思う。完璧でなくても、惨めでも、醜くてもそれでもいい、そう生き残ってもいいと言っている葉子の姿は、人間的だと思う。その姿は生きていることを安心させる。葉子は、どうもがき続けても思う通りに、完璧な姿で生きることができない人生、その可能を見せているのだと思う。

参考文献

- (1) 石丸晶子 (1986). 『或る女』論、日本文学研究資料刊行会 (編) 『有島武郎、日本文学研究資料叢書』 (p. 1～p. 12) 有精堂出版株式会社.
- (2) 有島武郎 (1995). 『或る女』新潮社.
- (3) 有島武郎 (1971). 「惜しみなく愛は奪う」 『有島武郎集 新潮日本文学9』新潮社.
- (4) 有島武郎研究会 (編) (2010). 『有島武郎辞典』勉誠出版.
- (5) 江種満子 (1977). 葉子の死、もしくは有島の方法について 『国文学 解釈と教材の研究』 22(10)、p. 138～p. 146.
- (6) 遠藤祐 (1989). 有島武郎と死 『国文学解釈と鑑賞』 54(2)、p. 56～p. 61.
- (7) 鎌倉芳信 (1986). 「或る女」論—モデル問題を中心に—、日本文学研究資料刊行会 (編) 『有島武郎、日本文学研究資料叢書』 (p. 139～p. 149) 有精堂出版株式会社.
- (8) 竹腰幸夫 (1986). 『或る女』論—母、葉子、愛子をめぐって—、日本文学研究資料刊行会 (編) 『有島武郎、日本文学研究資料叢書』 (p. 30～p. 50) 有精堂出版株式会社.

大学生から社会人へ

——アルバイトが心のユトリを作る

蔡佳凝

目次

一、初めに	3
二、先行研究	4
三、調査方法	5
四、調査結果	5
1、ドイツへ行くためだったMさん	
——学生時代にアルバイトした経験のある社会人	5
1.1 インタビュー調査の概要	5
1.1.1 背景および対象	5
1.1.2 実施時間と場所	6
1.2 調査内容	6
1.2.1 学生時代のアルバイト	6
1.2.2 アルバイトを始めたきっかけ	6
1.2.3 アルバイトは大学時代の位置づけ	6
1.2.4 アルバイトから学んだこと	7
・料理の作り方とコーヒーの知識	7
・上下関係	7
・お金の仕組み	7
・性格的に社交的	8
・責任感	8
・人とコミュニケーション	9
・仕事の面接には役に立った	9
1.2.5 アルバイトで大変な時	9
1.3 まとめ——大人への一歩	10
2、経験が欲しかったTさん	
——アルバイトをしている女子大生	10
2.1 インタビュー調査の概要	10
2.1.1 背景および対象	10
2.1.2 実施時間と場所	11
2.2 調査内容	11
2.2.1 アルバイトについて	11
2.2.2 アルバイトを始めたきっかけ	12
2.2.3 アルバイトから学んだこと	12
・仕事のやり方	12
・親や先生に感謝	12
・未経験だから、一層頑張らなきゃ	12
・アルバイトを探したときの失敗から	12
・世界が変わったし、自分自身もすごくかわってきた	13
・社会人としての態度	14
2.2.4 これからのアルバイト	14

2.3 まとめ——将来がはっきり見えてくる……………	14
3、 暇つぶしのつもりだったVさん	
——大学に在学している女子大生……………	15
3.1 インタビュー調査の概要……………	15
3.1.1 背景および対象……………	15
3.1.2 実施場所と時間……………	16
3.2 調査内容……………	16
3.2.1 アルバイトについて……………	16
高校……………	16
大学……………	16
3.2.2 アルバイトを始めたきっかけ……………	17
3.2.3 アルバイトから学んだこと……………	18
・ある程度の金銭感覚の形成……………	18
・丁寧な言葉遣い……………	18
・冷静に対応……………	18
・自分で仕事を見つけて役に立ちたい……………	18
・仕事からの信頼関係……………	18
3.3 まとめ——家族や学校と違う頼る場……………	19
五、終わりに……………	20
1. 先行研究との比較……………	20
2. 心のユトリ——心構え……………	21
後書き……………	23
引用文献……………	24

大学生から社会人へ——アルバイトが心のユトリを作る

一、初めに

日本へ留学しに来て、ここでの生活につれ、日本人大学生の中でアルバイトは普遍的だということに気づいた。

文部科学省の「学生生活調査報告」をもとにすれば、2002年には大学生のうち、「授業期間中に恒常的にアルバイトに従事している学生」の比率は、37.7%に上達している。それに、「長期休暇期間中だけの」および「授業期間中の臨時的な」アルバイト従事者を加えて、一年間に何らかの形でアルバイトを体験した学生の比率についてみれば76.8%にもなる。(岩田弘三 武蔵野大学現代社会学部紀要第6号 pp11-22)。この調査報告からは日本人の大学生の中でアルバイトしている人は多数に存在し、一般的だということが分かる。アルバイトをする時間は休みだけではなく、学校に通いながらやっている人が多いらしい。ちなみに、ある友達の場合、女の子であるにもかかわらず、夜中の十一時ぐらいまでアルバイトをしていて、終わったら家に帰って、片付けて、寝る時はもう夜更けになることも常であることにびっくりした。私自身の場合、国でアルバイトをしたことがあるが、短期バイトで、長い休みのうちにしたから、友達が大学に通う同時に一週間三回以上十時間以上もアルバイトをするのは私にとっては想像できないことであった。日本人大学生の場合は夕方から夜中まで、週末もアルバイトしている人が多く、アルバイトは授業、サークルと同じように大学生生活に欠かせない部分だと見える。

さらに、日本人の友達に聞くと、アルバイトをするのは、特に生活費のためではなく、お小遣いとかに使いたいお金のためとか、学校以外の世界を体験したいとかの原因もあるそうだ。アルバイトの種類もサービス系とか完全な社会人と一緒に仕事をするアルバイトがあるらしい。どこへ行っても、コンビニの店員さんやスーパーのレジさんとかの持ち場では、しっかりしていた大学生の姿を見つける。学校では大学生であるが、アルバイト先へ行くと、社会人と同じように持ち場で自分の役割を果たしている。アルバイトをすることによって、性格にも人生観にも影響がもたらされると思う。アルバイトを経験したことのある学生が職場に入る時、早めにもその場の雰囲気慣れていくだろう。

一方、いま中国では、職場新人には、大学と社会のギャップが大きく見られているとよく指摘されているが、そのギャップを埋めるために、四年生のインターンシップを通じて会社で実際に仕事をさせる解決策もあれば、一部の学校で学校より備えられた環境を利用して、大学生たちが起業するのが提唱されて、社会とのやり取りの中で社会人としての素質を身に付けさせる解決策もある。しかし、現状を見れば、いずれも少数の大学生しかできないのである。大学と社会のギャップを小さくする目的を果たすために、日常的に行うことができるアルバイトが解決策として考えられる。

しかし、日本人大学生のように週末または平日の夕方から夜中にかけての時間をアルバイトに使うと、あっという間の大学時代に勉強や娯楽に余裕がまだあるのか、自分の人生に役に立てるのかますます疑問に覚えてきた。さらに、日本人の大学生はどういうふうなアルバイトと勉強や生活のバランスを取っているのか、一生懸命アルバイトするのは何を求めているのか、後からアルバイトの経験を振り返ると役に立てたと思うのか、アルバイトの経験を聴き、アルバイトは大学生と社会人をつなげることができるのか、この論文で明らかにしたい。

二、先行研究

松崎康欲(2011)は15年にかけて、交野高校と門真なみはや高校におけるアルバイト調査から最低賃金、労働時間・休憩、人間関係、セクハラなどの面から見える学生アルバイトの実態および年代の変遷による変化をまとめた。調査用紙に、「したこと(職種・仕事内容)」、「時給、または日給」、「エピソード」といった三つの質問が出されて、答えにより、特にエピソードを見ると、いろいろなアルバイトの実態が見えてくる。さらに、アルバイトは学習時間を削ったり、親の言うことを聞かなくなったり、ストレスがたまったりしたマイナスの影響や、礼儀がよくなったり、細かなことに気がつくようになったというプラスな面があることが分かった。しかし、この調査の結果はアルバイトのマイナスの面に注目し、簡単なエピソードを書いてもらっただけなので、どのような過程を経て、礼儀がよくなったり、細かなことに気がつくようになったのはよく見えてこないと思う。だから、私は一人ひとりに対するインタビューを通して、詳しいエピソードを聞かせてもらい、アルバイトで何の成長がみられるか、つまりアルバイトのプラスの面をめざし、見ていきたいと思う。

西広樹・柳澤さおり(2009)は早期退職の解決策として、個人が企業で働き始める時期までに、社会に必要とされる基礎的なスキルや態度(2006年経済産業省が「社会人基礎力」と定義)などを学習することが一つだと考えた。インターンシップなどに参加しなくても、大学生が日常的に行う活動を通して、社会人基礎力を身につけるはずだということをも前提として、大学生のアルバイトに注目して、アルバイト活動による学習内容を定量的に測定し、アルバイトの目標が異なれば、学習する内容も異なるという目標が学習に及ぼす影響を明らかにし、職務遂行活動の意識化が学習を効果的に促すことやアルバイト活動で学習した内容が異なれば、職業選択に関わる心理的状态も異なることを示した。調査方法として、アンケートを通して、“今までに経験したアルバイトの業種”、“アルバイトの目標”、“アルバイトの活動の意識化”、“アルバイト活動による学習”、“職業選択に関わる心理的状态”について大学の三年生と四年生に答えてもらった。

西・柳澤の研究により、“アルバイト先で友人や異性など人と出合いを望んでいる人間関係目標はどの学習内容とも関連が見られなかった”ということが指摘された。それに対し、人間関係を目指し、自分からの努力があれば、具体的にアルバイト先の仲間たちの受け入れようにもよるものだが、少なくとも何か習えると仮説が立てられるのではないか。この仮説を本論文で調べてみたい。

杉山成(2009)は大学一年生を調査対象として、彼らのキャリア意識の実態とその形成に及ぼすアルバイト経験の効果について、2007年の4月と7月に縦断調査を行い、アルバイト経験それ自体がキャリア意識に及ぼす直接的な影響は、ほかの関連要因に比してそれほど強いものとはいえないという結論を出した。しかし、アルバイトを継続するなかで、アルバイトの位置づけが形成され、自身のキャリア意識の明確化につながるということが示唆された。この点では私のアルバイトが大学生と社会人をつなげる機能を果たす仮説と一致するが、杉山はその中でどういうふうに大学生と社会人をつなげたのかについて明らかにしたとは言えないので、その上詳しく調べていきたい。

田村ほか(2011)は17から22歳までの大学生に答えてもらったアンケートにより、アルバイト活動の経験の仕方によって、現代社会における望ましい人間形成のあり方と関係する次元を明示する心理的well-beingに与えられる影響に違いが見られることを明らかに

した。田村ほかの研究では学生がアルバイト活動でどのような経験をしたかに注目したが、アンケートの数値分析が専門的で、考察の部分を読まないと結論まで理解するのが難しいと思うので、実際のインタビューにより、みんなの同感呼びやすいように、一人ひとりのアルバイトのエピソードからアルバイト活動で大学生たちは何を求めているのか、どのような経験をしたのか、何を得たのかについてみていきたい。

三、調査方法

いままでの大学生アルバイトを研究テーマとした論文をめぐってみると、アンケートを方法として調査したケースは多かったのだが、私はインタビューという手段を選ぶ。人それぞれのアルバイトするケースは違うし、アルバイトは人それぞれにの働きもさまざまなので、全体的傾向が見えるようなメリットを持っているアンケートより、一人ひとりに対して、インタビューをするほうがもっと詳しいことが分かる。私の狙いはアルバイトは大学生の人生成長に与える影響を見つけて、大学生と社会人をつなげる方法として、アルバイトが考えられるのかについて調べることだから、個別のインタビューにより、アルバイトした時の状況やエピソードが深く聞けるし、インタビュー対象の表情や話のアクセントからその人の気持ちや言いたいことなどいろいろ理解することができる。さらに、アンケートとかの決まっている形式に対し、インタビューの問題はインタビュー対象の場合によって、その場で変えることができる。テーマから離れる恐れがないし、話の盛り上がりによって、いろいろ話してもらえ、自分の考えたことがない側面からインタビュー対象のアルバイト経験を理解することができるようになる可能性がでてくる。そして、世界のどこかではなく、どれほど偉い人でもなく、私が今住んでいる秋田市大学生にとってアルバイトが自分にどんな影響をもたらしたのか知りたく、身近なアルバイトをしたことのある社会人一人とアルバイトしている大学生二人にインタビューした。

四、調査結果

1. ドイツへ行くためだったMさん

——学生時代にアルバイトした経験のある社会人に

1.1 インタビュー調査の概要

1.1.1 背景および対象

対象は短期大学を卒業してから、8年間仕事してきたMさん。ある通訳の手伝いの仕事で、係員としてのMさんに出会った。ガイドしてくれたMさんとはしょっちゅう話した。仕事が終わって、分かれる時に、Mさんに名刺をもらって、後はFACEBOOKで友達になった。それしかかわりがなかったにもかかわらず、私がインタビューの願いをして、Mさんは快く承諾し、インタビューの対象になってくれた。

最初の5年はアパレル会社の海外事業部で海外と直接のやりとりのセクションについての仕事していた。その後は事情があって、一回やめて、秋田で貢献できる観光の仕事がやりたいと思って、秋田の魅力をアピールする県の部門に入った。広報係を一年ぐらいやって、その部門の委託を受けて、観光の映像製作とかイベントをやったりする会社に入った。いまはある株式会社のデザインチームで活躍している。

1.1.2 実施時間と場所

インタビューは三回にわたってやったのである。第一回と第三回は2012年4月6日と2012年5月21日にカフェで行い、第二回は2012年5月7日にインターネットを通して話した。

第一回はアルバイトが大学から社会へ歩む過程に何か役に立つのかというはっきりしていない問題意識を持ち、社会人として働いているMさんにインタビューしたが、インタビュー資料を整理しながら、先生の意見をもらい、問題意識をもっとはっきりし、補足として、第二回と第三回のインタビューを行った。

1.2.調査内容

1.2.1 学生時代のアルバイト

高校時代にアルバイトをしていなく、大学一年生のときから二年生の終わりまで、家から自転車で5分ぐらいの小さいカフェで、一年四ヶ月ぐらいアルバイトを続けていた。

カフェでコーヒーを作ったり、食べ物を作ったり、食器を洗ったり、お店の掃除をやったり、後は、レジも、お客様の注文もした。

時間は午後5時から9時まで、一日4時間で、一週間6回ぐらいアルバイトが入っていた。休みのときは、午後1時から9時までだったり、午後3時から9時までの日もあった。

時給は800円で、一ヶ月8万円ぐらいもらえた。3万円は普通の遊びのお金で、残りの5万円ぐらいはドイツへ行くために貯金していたという。

1.2.2 アルバイトを始めたきっかけ

アルバイトを始めたきっかけについて、「ドイツ語専攻なので、論文を書くときにドイツの建築様式についての論文だったから、現地に行かないといけないということになって、一年生のうちからバイトをしないとと思って、それを目的としてバイトを始めた」とMさんが言っていた。

1.2.3 アルバイトは大学時代の位置づけ

授業は一日4コマぐらい取っていて、ほとんどは毎日朝から午後4時までには授業で、終わったら、すぐアルバイトへ行く状況であった。アルバイトは勉強に衝突しないかと聞くと、「ちょっとあったんで、例えば、宿題は量が多いときにはもうバイトして、疲れて、帰って、眠くなってしまってから、朝早く起きて、宿題をやったこともあった」と答えた。

アルバイトをしていて、部活の時間があまりなく、茶道部は週一回だけあったが、たまに行っていたらしい。

「大学時代のことを思い出すと、一番印象に残ったのはやはりドイツへ行ったことだったが、勉強するよりはバイトしていたのは思い出が強い。」

アルバイトの時間について聞くとき、何時から何時までとか、一週間何回やったかすぐ答えられたが、授業の数や時間を聞くと、少し答えに自信がなさそうにためらった。大学時代に勉強とアルバイトを両方一生懸命やっていたかもしれないし、さらにアルバイトを始めたのは卒論のためという理由だったが、今振り返ると、アルバイトの思い出が勉強より強いというのは時間的に多く占めていたのがもちろん、結果的にアルバイトの経験は印象深く、今にも役に立っているのではないかと推測できる。

部活とアルバイトで得たものがどっちが多いと聞くと、「バイトだと思う。部活も、団体をまとめるという役割もしたし、日常生活の中で、自分はどういう役割をするのか、しなきゃいけないのか、ということとか、学べただけど、やっぱり、それは学校の中での話で、バイトは、外に出ることだから、やっぱり、いろんな人と出会うでしょう、一度も出会ったことがない人にであったりするし、すべて初めての経験だから」と答えた。

部活とアルバイトの重要さは簡単に比べることはできないかもしれないが、部活より、アルバイトのほうが社会へ導く道を開いたのは明白だ。

1.2.4 アルバイトから学んだこと

責任感、人とコミュニケーションの仕方、先輩後輩の上下関係、お金の仕組み、料理の作り方、コーヒーの知識、業者さんとのやり取りとかにまとめられる。

・料理の作り方とコーヒーの知識

料理も少し向上したし、友達と店へ行くときに、これはこういう特徴があるよと紹介できるようになったという。アルバイトで関係の知識を身につけるといえるのはアルバイトした人の共通の利点だと言える。Mさんの場合はアルバイト関係知識を身につけるだけでなく、実際に生活に応用できるようになった。

・上下関係

「それは部活でも学んだけど、社会に出て、例えば飲み会するとき、上座とか末座基本的に挨拶もそうだけど、ちゃんと先輩のことを聞くとか、バイトをしなかったら、もうゼロの状態だったら、ゼロの状態ですと入ると、ちょっと大変かもしれない、ちょっとでも、バイトだから、会社とは違うけれども、お客様と自然に振り合う機会もあって、こう教えてもらって、ある程度ちょっとまったくゼロの場合よりはちょっと上にいるわけで、こういう時こういうふうにするんだとかで分かるから、良かったと思う。最初5年間勤めた仕事はカフェで出会った人が紹介されて、入ったから、私にとってはたぶん重要かもしれない、常連さんとどんどん仲良くなって、今仕事を探しています、学生ですのでといったとき、こういう仕事があるよって紹介してくれてた。」とMさんが言っていた。

・お金の仕組み

「金銭感覚は全くなかったから、お年玉もらったら、お小遣いもらったら、すぐ全部使ってしまった

が、目的があったら、貯めることもあったし、貯める癖をつけた。」

Mさんはドイツへ行くために、アルバイトを始めたから、目的に向かい、お金を貯めなければならなくなり、自然に金銭感覚ができた。

「後は、会社は利益を増やすために、経費削減をしたりしてるから、無駄なところに会社自体はお金はかけないという方針もけっこうあるから、その面でも、無駄遣いしなくなった。」

アルバイトのお店で無駄遣いしないように努力した経験があるからこそ、お小遣いやお年玉をすぐ使ってしまうのではなく、お金を大切に使わなきゃという意識が強まり、会社の経費削減方針に納得でき、実施できることだろう。

「実家から学校を通っていたから、一人暮らしをしていた友達に比べて、社会から得た経験が少ない代わりに、バイトから得た経験が多い。家にいると、親が何でもやってくれるし、買い物も自分でしないから、何にどのくらいお金がかかるか分からなかったが、お店で例えば材料を買いに行くと、「ほーこんなにかかるのか」とか実感できた。あとは、今日の在庫はこのくらいあるとしたら、次の日はどのくらい注文したらもつかという思い出す程度にそういう計算もしなくちゃいけなかったりする。」

社会人になるまで生活の常識さえ知らないまま日々を送るという実家通いのデメリットはMさんの場合にアルバイトの経験のおかげで、実際目で見たり、やってみたり、いろいろ身につけた。

・性格的に社交的

「人見知りだが、普通に話すのはいいけど、いろいろな人と話すのは苦手で、おじさんとかお婆さんとか、そういう世代の人も来るわけで、すごく苦手だった。同世代の人じゃないと、それはもう直ったし、直ったより、慣れてきた。人が好きなおじさんがいたら、話がかけられたら、ちゃんと「はい、はい」と話せるようになった。同じ年の女子話はほとんどだったけど、それと親（との話し）、そういう今まで触れたことがない世代も触れて、ぜんぜん会話の内容は聞いたことないようなことは言われると、最初はすごく戸惑っただけど、それが、今仕事していて、外でいろんな人と会うようになって、いろんな年代の人もいるので、そういう時、すごく役に立ったかも。」

聞いたことのない話などに戸惑いながら、ふさわしい対応ができるようになった。それは、家族や学校の友達と違う世界のいろいろな世代の人たちと話すチャンスを与えたアルバイトのおかげでなのではないか。

「お店にいろんな世代の人が来て、いろんな人と会話するようになった。その世代の人に合わせて会話の内容を変えることは自然に皆できていると思うけど、私は例えばおじさんになったら、野球のデータとか、昨日の野球面白かったですか、とか話す。すごく美術が好きなおじさんがいて、私も好きだったんですけど、そんなに詳しくなくて、でもそのおじさんはすごく美術の話をしたがる、教えたがりというか、それで教えてもらってたんだけど、それだけだと、会話についてはいけないと思って、毎日来る人だから、ちょっと自分で図書館に行って、お話し聞いたので本を見てきましたという会話をしたら、すごく喜んで、いいお客さんになってくれた。店長も喜んでくれて、差し入れとかもくれるようになった。」

分からない話がかけられると、相槌をしながら、適当に答えればいいのに、Mさんは常連さんをはっきりさせないように自ら資料をさがし、話についていけるように頑張った。その努力は単なるお店の利益を考える上で自分の仕事をよくするために取った行動なのではなく、一人の人間として、コミュニケーションをうまくいけるように積極的に前へ歩

んだ一歩だと言えるだろう。

後輩にアドバイスをしたら、

「バイトがいい、社会人に一年目は初めてのことはありすぎて、すごく大変なんだけど、ちょっとでも、その経験があると、心にユトリが持っているかもしれない。」

と社会人としての仕事に心のユトリを持つために、Mさんは勧めたがる。アルバイトの経験が後々実感しているからこそ、そういうアドバイスをしたのではないか。

・責任感

「例えば、ホットミルクが頼まれたとしたら、間違っただけのレモンティーとかを出すと、それは間違っただけの人が悪いが、お客様にきてみたら、「あ、ここの店はそういう店なんだ」というふうに、あの個人じゃなくて、お店として取られるから、その店でちゃんと働いている格好を持ってあまりミスをしたくないという責任感が初めて意識した。自分はお店の一人として、大変なときもあると思うが、自分の都合で働くではなくて、お客様第一という考えも。部活で部長をやっていたりして、ここに所属しているからというリーダー的責任感を学んだことがあったが、そういうのは社会のバイトだから、社会にいてそういう責任感を感じるのは初めてで、それは後々に生かされた。例えば、いま仕事をしていて、取引先の人と取り合うときも、ちゃんと笑顔を忘れちゃいけないし、話し方とか、敬語の使い方とかも学んだ。会社で経験がどんどんあがってくると、任される仕事内容もだんだん重要になってきたりするの、それは責任感がないと、絶対自分でやらなければという思いがないと中途半端で終わると、周りの人にも迷惑をかけたってしまうからそれはまず役に立った。」

Mさんはアルバイトでミスをし、やり直すことにより、「お客様第一」という責任感の重さを感じた。さらに同じく集団における学生の部活に対し、社会人としての責任感他人や集団利益と関わり深く、より大切に扱わなければと意識し、後々役に立った。

・人とのコミュニケーション

「もともとは人見知り激しいのが、かえって、一回会ったこともないお客様いっぱい入ってくるから、でも、いつも「いらっしゃいませ」ってやっていて、会話とか振るうちにだんだん慣れてきて、いまはいろんな人と会うんだけど、内心はもう「どうしよう」って感じたけど、表面はそういう経験がいっぱい生かされたから、自然に笑顔で「始めまして」って挨拶をできたり、会話はスムーズにできるようになってきた。」

人とうまくコミュニケーションができるようになったのは慣れたというより、むしろ戦いを多く経験している兵士のように、いわゆる“百戦錬磨”だからのではないだろうか。そういういろいろな人たちとコミュニケーションさせるアルバイトを経験したからこそ、いまのように自然に笑顔でコミュニケーションができるだろう。

・仕事の面接には役に立った

仕事の面接のときにアルバイトの経験は役に立ったかと聞くと、最初の仕事の面接で、ちゃんと笑顔で答えてきたのはアルバイトの経験があったからと答えた。「怒っている顔で「いらっしゃいませ」と言っても、お客さんは気持ちもよくないし、笑顔で迎えられたと、嬉しくなるから、お互いに仲良くなって、初めて来たお客さんも何回も来てくれるように。リピーターになってくれる。」という経験があって、「面接官は知らない人なんだけど、社会人になる初めての本格的な面接で当時自分何を話していたかさ覚えていないほど緊張しすぎたけど、なんで採用してくれたかと聞くと、笑顔がいいと褒められた」とい

う。インタビューを受けた時もMさんはずっと素敵な笑顔で話していた。こんな笑顔はMさんのもともと優れていた性格により自然にできたものだと思うが、アルバイトの経験はむしろMさんに笑顔の美しさやコミュニケーションにおける機能を実感させた。

1.2.5 アルバイトで大変なとき

「ほんとうはコーヒーがすごく苦手で、新しいコーヒーの豆が来る時、試飲をして、お客様にこういう味ですよと勧めていかなければならないので、まず一つ辛かったこと、あと、料理をしたことがなかったのも、お客様にちゃんときれいにさせるものをしっかり作らなきゃのときに、時間かかってしまって、スムーズにできないとき、それがすごく大変だった。あと、掃除なんて、自分の部屋すらしなかったけど、お店全体を、手を抜かずにやらないと飲食店だから、食中毒になったら、大変だし。」アルバイトのときに、目上の人に叱られたことがないかと聞かれたら、「叱られたことがないけど、お店の人たちは優しい人で、こういう時はこうやって見たらどうみたいなアドバイスが多かった。」という。

Mさんのネットでのつぶやきを見ると、毎日の生活の中で、細かなハイライトを見つけて、楽しく毎日を送っていそうで、大変なことがあっても、微笑みながら前へ進んでいくタイプなので今のように気楽に大変な思いを述べていた。

ただし、友達と遊ぶ時間が減ったのはアルバイトをして、残念だったことだという。

1.3 まとめ——大人への一歩

卒論のためにドイツへ行く。ドイツへ行くためにお金を貯める。そのために大学のアルバイトを始めたMさん。社会人として、いままで歩んできた道を振り返ると、その土台を築いたのは大学時代のアルバイト。就職の面接での緊張しすぎながらの笑顔、集団の一員としての責任感、初対面の人に対してもできる積極的なコミュニケーション、任された仕事を完成させる。いずれもアルバイトの経験があって初めてでき、社会人として欠かせない素質なので、後々役に立っている。自立生活につれ、お金を計画的に使う金銭感覚や自立能力の向上がだんだんできるようになる大学生に比べ、実家通いのMさんはアルバイトを経験し、身につけた。一人前の大人へ歩むところ、アルバイトはその第一歩を押し出した。

Mさんは初めからはっきりとした目標があり、その目標を達成するまでずっと頑張っていた。アルバイトは比較的に楽だったし、お客さんとのふれあいで、仕事の達成感を得て、仕事の意欲も強くなった。重要な仕事を任されて、責任感を感じ、後の仕事にも生かされた。コミュニケーションの取り方、上下関係、お金の仕組みなど社会人としての必要なことを学んだ。

Mさんの周りに、同じようにドイツに行った人たちの中で、親から資金をもらった人もいれば、洋服を買いたいとか、お友達と遊びに行きたいという理由で、アルバイトをする人が多かった気がするし、あまりアルバイトに興味ない人もいたらしい。しかし、Mさんは一年生の時から卒論のテーマを決めて、アルバイトでお金を稼いでドイツに行くためにずっと頑張っていた。「親からも資金を貸してくれると言ったけど、大学生にもなったし、自分でもある程度でお金を貯めて親に迷惑をかけたくない」とMさんが思った。こういう自らアルバイトしなければならない積極的な動機があつてこそ、主体性が働き、Mさんにとってのアルバイトは自分の人間性成長に役に立つことができた。

2、経験が欲しかったTさん

——アルバイトをしている女子大生

2.1 インタビュー調査の概要

2.1.1 背景および対象

秋田大学に在学している三年生のTさん。

Tさんとはある日本人学生と留学生の交流を図る授業で出会った。同じグループに分けられたことがあり、その時たまたまアルバイトの話をして、詳しくは話さなかったが、Tさんがあるテレビ放送会社でアルバイトしていることが分かった。仕事の身分証明書を見せてくれて、2年生だったTさんが学生アルバイトとしてこんな会社で働くことに感心させられた。

Tさんは道で会うと、積極的に声をかけてくれたり、ネットでログインしているTさんを見つけて、助けてもらい、熱心に問題を解決してくれたり、ほかに重なっている授業で顔を合わせたりしていた。

この論文を書くために、インタビューを決めた時、普通のアルバイトではなく、なかなか経験できないことをやっているの、面白い話になると思い、あるテレビ放送会社で働いているTさんを思いついた。

2.1.2 実施時間と場所

インタビューしたのは2012年5月31日の午前、レストランで注文した後、料理が出る前にアルバイトした経験の基本情報を聞かせてもらい、その続きは昼食の後、カフェに移し、やったのであった。

2.2 調査内容

2.2.1 アルバイトについて

高校時代アルバイトしていなく、大学の一年目は勉強が中心だったので、二回の短期バイトしかしたことがない。二年目からいまままで四つのアルバイトしてきた。

- ・大学一年目の短期アルバイト：あるホテルの宴会サービスを五日間をしていて、実家のところで、コンサートでゆずを提供したアルバイトを一日したことがある。
- ・あるテレビ放送会社（以下は“A社”と称する）のデスク補助：アナウンサーさんの天

気予報の原稿を作っている。全国各地から資料が送られてきて、その資料を見ながら、アナウンサーさんが読みやすいように書き換える。電話の対応とか、メールの送受信とか、ファックスを受け取ったり、送ったり、アナウンサーさんがニュースで読む原稿をコピーしたり、並べたり、天気予報の総室でボタンを押しながら、お昼の前の天気予報の画面を替えるのもやっている、ほぼ一日拘束されるから、いろいろなことをしている。月に3回程度。

・ある大学のPC講座の先生：一年生にパソコンの使い方を教える。大学で出すレポートとかプレゼンテーションとかの仕方を教えたり、ゲームとかの形式でこういうふうにするよとよくなるよみたいなのを教える講座だが、ただ教えるだけが仕事ではなくて、そういうためにどういうふうに教えるかの話し合いも全部大学生が運営している。この仕事の面接で成功したのは話せるネタをもっていることと、パソコンをやりたいという気持ちがあったからだそうである。ここのネタというのは「高校の放送部の大会で全国大会まで行きました」という話をしたのである。このアルバイトを通して、後輩たちと会えるし、いろいろ教えることができた。このアルバイトは一週間三回。四月の末から始めて、七月ぐらいで終わるといふ。

・家庭教師：大体月に3回ぐらい行っていて、回数はそんなに多くなく、数学と英語を教えるて欲しいということでこのアルバイトを発見したのが、生徒と仲良くなるうちに社会とか国語とかも教えるて欲しいとたまに言われて、お手伝いしているという。一対一という形式で生徒の家でやっている。生徒は中学校の一年生の女の子で、集中力が足りないみたいな障害があって、教えるのにすごく苦勞して、工夫しなければいけないのが辛かったらしい。一回一時間しかないけど、その中でいかに打ちとけたり、教えられたり勝負である。

・留学生をお手伝いするチューター：新しい来た留学生を一対一で手続きを手伝ってしたり、相談相手をしてあげたりする。

2.2.2 アルバイトを始めたきっかけ

Tさんは大学一年の時は卒業単位の半分ぐらい取ったから、一日四コマの授業が入っているのが普通だった。「その時、バイトをやっている子を見て、自分もやらなきゃという気もなるんだけど、勉強とか、サークルとかやりたいことがたくさんあって、初めての一人暮らしであったから、毎日毎日過ごすのに精一杯で、バイトをしようという考えとか気持ちの余裕がなかった。」一年生の時は授業とサークルを一生懸命やっていて、アルバイトをする余裕がなく、二年生に入ると、お金とか経験とか欲しかったのでバイトを探し始めたらしい。

PC講座のところは、「自分もその生徒だったから、その時担当してくれた先輩が声をかけてくれて、自分がそういうふうに経験したから、後輩たちにこうしようと思っている。」という。どうしてこの仕事を応募したと聞くと、「声を使うことがしたかったし、大学に入ったときに教員免許を取ろうと思っていたから、教育実習前に人に教えるっていう経験をしてみたい」とTさんが思っていた。

2.2.3 アルバイトから学んだこと

・仕事のやり方

「社会人みたいなバイトしているから、電話の対応のしかた、コピー機の使い方、アナウンサーの原稿の並べることによって、どうやって取りやすいか読みやすいかとかを考えながら、並べたり書いたり

しているから、人に気を使うこと、いろいろバイトから習ったから、これから生かせればいいかなあと
思っている。」

TさんはA社でのアルバイトを通して、仕事のやり方を身につけ、これからも生かしたいと思っている。

・親や先生に感謝

「家庭教師の仕事で自分がこれまで教えてもらった先生たちとか、自分の親はこういう思いで私を教
えていたんだなあちょっと分かってきた感じがする。親とか先生にいっぱい怒られたり、悲しめたり
して、苦勞をかけて、申し訳なかった。大学に入って、前の先生たちにお訪ねしたりはしたことがない
けど、たまには吹奏部の演奏会があるんだけど、来てくださとかのメールしたりする。」

教えられる方から、教える方になり、巧みな身分轉換を通し、昔親や先生が自分に向け
た苦勞を実感し、理解でき、感謝できるようになった。それは偉い人間性上の成長なので
はないだろうか。

・未経験だから、一層頑張らなきゃ

「大学一年目の二回のバイト経験は短かったが、体力の勝負で大変だったし、自分は全然バイトをし
たことなかったから、ずっと経験している人たちといっしょに仕事するわけだから、人より動かなけれ
ばいけないとか、頑張らなければいけないのは心のどこかで感じながら、すごく気を使って、先輩たち
の迷惑になるようなことはしてはいけないと思って、頑張った。」

初めてのアルバイトについて、Tさんはその時の感想を述べた。未経験の辛さを味わい、
頑張らなきゃならないとしみじみ感じた。

・アルバイトを探した時の失敗から

「A社に採用される前、バイト5個ぐらい受けて、全部落ちていた。人前に出るのがすきだし、放送
部やっていたから、どうしても、声を使いたかった。将来でも必要であるということで、英語とかパソ
コンを使う仕事がしたかった。その関係でホテルのフロントとか、テレホンアポインター、いっぱい
受けたんだけど、全部落とされて、どうしようとするごく悩んで、いける仕事があるのかなあと思うぐら
い落ち込んで、無理ではないかなあと思った。ちょっと諦めたいところにA社とかのところにPC講座
の採用情報を先輩がくれたことで、面接はあるのが、やっているやらないもんだから、人も足りないし、
来てくれればすぐ採用になるだろうからと言われて、気持ち変わって、A社でのバイトを始めた。そし
て、まだ仕事に慣れていなかったうちに、先輩がやめて自分が一人なっていまい、仕事があまくいけな
くて、一人で抱え込んで、ぐずぐずしていたりした時期もあった、後から考えると、すごくよくない
と思うけど、よくあの時期を乗り越えたなあと思った。バイトの時あんな大変な思いをしたんだから、そ
れに比べたら、いまの公務員試験勉強も将来の就職もどんな状況であっても、対応すればできると思
うようになった。」

アルバイトを探した時の失敗であろうが、実際仕事をする時に遭う困難であろうが、落
ち込んでいたままだったり、チャンスをもたらしたりして、受身な態度で乗り越えたと見え
るかもしれないが、その時の失敗は自分にふさわしい仕事や人生についていろいろ考えさ
せたことだろう。さらにそんな失敗から乗り越えた経験があるからこそ、今のTさんは自
信を取り戻し、「いまの公務員試験勉強も将来の就職もどんな状況であっても、対応すれ
ばできると思う」と豪気に言えるだろう。

「今思い出すと、辛かった時、いっぱいある。いまは全然辛くないけど、笑ってなんでも話せるけど、

すごく辛かったほうは最初多くて、PC講座といえば、眠れない時期はプランはいっぱい作っていて、夜もずっとしていることもあったし、A社だといえば、人の名前が覚えられなく人はいっぱいいて、呼べないから、話聞けたり、聞きたいことがあたりするとき、名前が分からないから、声をかけられないとか、仕事が覚えることが多すぎて。順番が分からないから、上司に怒られたりするとき、最初の三ヶ月は先輩と二人で仕事していたんだけど、四月からは一人で仕事していて、去年地震があって、精神的にショックを受けて、三月いっぱい仕事をしないまま、四月からいきなり一人になったから、仕事を忘れてるし、初めて一人だから、何をすることも覚えていない、本当に辛くて、上司にも何回も怒られたし、どうしようと思って、辞めたいも思った。やることも多いし、自分ひとりのミスで事故にもつながるわけだから、バイトだとしても、すごい責任のあるバイトだから。こういうプレッシャを減らすために、バイトが終わって、お風呂に入った後にお酒を飲むとか、帰りにすごい美味しいものを買って、帰って食べるとかした。友達は同行の話ではなかったし、親にたまに言うとき、仕事したことないから、生意気ばかり生きてきたから、やっと辛さ分かっただろうと言われた。」

Tさんにアルバイトで辛かったことがないかと聞くと、そう答えてくれた。今は楽しそうにアルバイトをしているのばかりを見て、そんな辛さを全然思わなかった。

・世界が変わったし、自分自身もすごく変わってきた。

「今までも現代人なんだけれども誰か何かやれといわれて、黙って待っている人間だったんだけど、仕事し始めてからは、次何やろうなにやろう、すごく考えられるようになってきた。積極的に人と話したり、電話とか出る対応の一つでも、明るい声で丁寧な言葉遣いですごく心がけるようになっていて、毎回対応していると、人に対する印象はどうなんだろうとだんだんすごく気にするようになってきた。直そう直そうといううちに、自分の携帯にかかってきた電話でも会社みたいな方になっちゃったりとかだいが慣れてきた。性格が明るかったけど、もっと明るくなった気がする。」

一緒に食事をした時はTさんが私より年下だけど、食器やティッシュを取ってくれるとか、気を配ってくれた。授業で自発的に自分のアイデアを皆に説明したり、プレゼンテーションで重要な役割を演じたりして、明るく積極的にやっているイメージが私には強い。Tさんのネットでのつぶやきを見ると、一日中何を予定とか、これから何をすることもというふうな計画的なものが多いらしい。それもアルバイトで積極性が促され、自ら何をするように考えることができるようになったからだと思う。

・社会人としての態度

「社会人としての態度はA社で覚えたこと。自分が仕事に行くのは、土日だから、人が少ないが、自分以外に学生がほとんどいないので周りにみんな社会人で、普通に自分の目の前とか説教されたときに集材の仕方が悪いとか、説教される人もいるわけだから、そういうのをみると、社会人としての態度はこうじゃないといけないとか、こういうことをしてはだめなんだとか、社会人になったら、こういうことがあるのかなあというように考えるようになってきた。すごく勉強にはなる。」

社会人としての態度は社会に出て、時間の経つにつれて自然に身につけるものかもしれないと思うが、それは、何度も失敗して、やり直すという繰り返しを代価として払わないとできないことだ。TさんはA社という社会の片隅に入り、そこでいろいろな社会の善し悪しを見ることができ、いろいろ考えさせられたのではないかと考えられる。

2.2.4 これからのアルバイト

Tさんはいま公務員の試験勉強として、講座を受けている。そのために、家庭教師の仕

事を辞めるつもり。一時間だけ教えるために、往復で3時間かかってしまうので、時間もったいないし、後輩が引き継ぎしてくれるという。ほかの二つのアルバイトは続ける気持ちではある。A社の仕事は空き時間も結構あるから、その時間に勉強できるそうだ。そして、月に3回しかないから、日曜日にシフトを入れてもらえば、両立できるという。もう一つの原因という、アルバイトですごく楽しい時間を過ごしているから、辞められないという。

これからのアルバイトの公務員講座との衝突に心配がないかと聞かれると、「心配はあるんだけど、講座を休んだ日はその講座はDVDでとってあって、DVDを借りることができるから、両立はできるだろうと、この夏休みまではサークルとバイトは普通にやるつもり」と言った。

2.3 まとめ——将来がはっきり見えてくる

「バイトをやっていなかったら、こんなにたくさんの人と知り合うこともできなかったし、自由にお買い物をしたりするとか、好きなことをしたりとかがして、すごくよかった。やってみないと分からないこともいっぱいあるから、簡単にまとめちゃえば、よかったなあというのが一番で。」とTさんはアルバイトの経験を簡単にまとめればよかったと言っていた。

親に「仕事をしたことがないから、生意気ばかり生きてきたから、やっとな辛さが分かっただろう」と言われたように、Tさんはまず短期アルバイトで仕事の辛さを味わった。その前、一切アルバイトを経験したことがないから、ほかの人より頑張らなければならないと思いながら、頑張っていた。一年目は勉強とサークルで基礎を固めた上で、二年目からアルバイトをしたくなった。最初は探すのも、仕事に慣れるまで頑張るのもいろいろあって、大変だった。自分なりに困難を乗り越えて、これからも自信を持って、生きていけるようになった。今考えると、アルバイトからいろいろ影響を受けて、無意識のうちに自分の世界も変わった。家庭教師をやって、先生や親が自分にかけて苦勞が分かり、申し訳ないと感じながら、感謝する心が生まれてきた。言われて黙って待っているのではなく、積極的に前に進むようになった。アルバイト先で周りの社会人の働くふりを身近で見ることによって、社会人になる心構えもだんだんできている。アルバイトを経験して、自分自身についてもいろいろ考えて、もっと分かるようになって、将来について、やりたいことをやるというふうに甘く考えるのではなく、現実に踏まえて、自分のことを考えて、公務員の道を選んだ。社会についても自分の認識が生じ、自分の将来にもはっきり計画があり、立派な一人前になっている。

高校で放送部での経験があるので、アルバイトを探した時声を使いたかったというし、A社でのアルバイトはアナウンサーと近距離で接触することができるので、自然にこの仕事に憧れるようになるのは当たり前だと思われるが、アナウンサーになれるならやりたいのは本心であるのが、アナウンサーになりたいとは今は思っていないらしく、声とあまり関係ない公務員を夢にした。その原因を聞くと、去年のどを壊したのも原因であるし、「部活とかでやるのと、仕事として毎日やっていくのはちょっと違うんだろう」と思っているそうである。「そして今不景気だから、アナウンスを仕事にしていくには安定がないからなあと思っている」という。Tさんは若き二十歳の年にもかかわらず、アルバイトは好きなことをそのまま仕事に活かすというのはそんなに簡単なことでもないことが分かっており、自分が憧れる仕事をやりたいだけと考えるのではなく、いろいろな影響要素を考え、自分の条件に合わせ、将来について、こんな大人らしい決定をしたのはアルバイトで

視野を広げたおかげで、自分の欲しい将来がはっきり見えてき、自分にふさわしい道を選んだのだと思う。

3、暇つぶしのつもりだったVさん

——大学に在学している女子大学生

3.1 インタビュー調査の概要

3.1.1 背景および対象

私は飲食関係のアルバイトをした経験があるが、アルバイトを通して習ったことより、時間的にも仕事内容にもきつかったので、アルバイトの辛い思いがまず印象的だった。それにしても、そのアルバイト先で私とほぼ同じ年の大学生たちは今までもアルバイトを続けているし、ほかの飲食店でも大学生のアルバイトさんが多いのを見て、アルバイトの何が彼らたちが頑張りが続けられる動力になったのか、大切な大学時代に勉強に全然関係なさそうなアルバイトをするのは本当に人生に意味があるのか、考えさせられる。それは皆がやっているから自分もやりたい気持ちとかだけでできないと思う。何が彼らたちを支えているのか、アルバイトから何を求めているのか、経験として振り返ると、人生に役立っているのか、第三人目へのインタビューから答えを見つけたいと思うのである。ラーメン屋さんで働いている秋田大学三年の女子大生Vさんにインタビューすることにした。

Vさんが中国へ留学しに来たときに私はVさんと出会った。その時、秋田大学へ留学することが決まっていたので、私はVさんの連絡先を聞いて、秋田に来ると連絡して、何回か一緒に勉強したことがある。ラーメン屋さんで働いて夜中までやるのが常だということにびっくりして、インタビューすることを決めた。

3.1.2 実施場所と時間

インタビューは2012年6月19日の六時半から九時半にかけて、筆者の住んでいる会館のラウンジで二人は夕食を食べて、気楽に話したあとに行われた。

3.2 調査内容

3.2.1 アルバイトについて

・**高校**：高2の8月からコンビニで二週間アルバイトをしていた。あまりよくなく、すぐやめて、高2の11月から、回転寿司でアルバイトをやりはじめて、高3の5月まで半年ぐらいアルバイトを続けた。

コンビニでのアルバイトはレジだけではなく、領収書や明細書とかはんこを押して返すとか、いろいろやるし、煙草の名前とかも覚え切れないし、最初アルバイトでお客様がいっぱいいるのに何をするか分からなくて社員に叱られるし、たまに学生がたくさん来て、いやな感じもするし、あまり柄のよくないコンビニだと思われて、やめた。

「回転寿司でホール系でお客様がきたら、『何名様ですか』って聞いて、『カウンターとテーブルどちらの席がいいですか』というふうに言って、席を案内したり、『今日のお勧めのメニューはなにににです』といって、お勧めの品物を勧めたり、茶碗蒸しや味噌汁とか頼まれたら暖めて出すとか、ビールとか飲み物も運んだり、会計の時枚数を数えたり、レジのひといないなら、レジのほうをやったり、食器を片付けたり、洗ったり、お持ち帰りを用意したりしていた。」店の人間関係があまりよくなかったが、その中で助けてくれたり、年が近いから仲良くしてくれたりする人がいて、最近入ったばかりだから、もうちょっと頑張ろう、もうちょっと頑張ろうとか思ったり、同じ高校の友達がいる、大学入学試験の受験準備までやっていた。

・大学：

◆ 一年生の時、一回だけ日雇いのスーパーでチーズの試食販売をした。

その時、売り上げの個数の少しの増加にもわくわくしたし、頑張っている自分を見て「お姉ちゃんこんなに頑張っているから、いくらか買ってあげる」というお爺さんや「頂戴頂戴」というかわいい子供とのふれあいもあったし、楽しかったが、朝早く起きて、電車であっという間に離れていたスーパーへ出勤しなければならなくなったし、チーズの販売だから、ちょっと寒くなった10月に冷えているところで一日いたし、試食販売を募集する会社へ提出する紙に商品の売り上げとかお客様の表情とか、自分の反省とかだれだれからの一言とかいろいろ書かなきゃならなかったし、会社からの説明が足りなくて、現場にいて看板の取り付け方が分からなくて、工夫したし、いろいろ大変なところがあった。楽しいところもあったけど、二度としたくないようなアルバイトでした。

◆ 二年生の四月末からラーメン屋さんでホールとして働き始めて、一週間一回か二回の頻度でいままでずっとやってきた。今年8月に留学する予定があるので、7月いっぱいまでやめることにした。すごく楽しいアルバイト。

どうして楽しい：

◇ 「自分の仕事が終わったから、いいやとか」思うのではなくて、「空いていたらやってあげよう」という気持ちが自然にでてくる。誰かできないことは誰かフォローするように協力の意識が強い。

◇ ある程度にゆるい、決まった休憩時間がないから、自分の仕事をちゃんとしていたら、お客様があまりいないとき、座って休んでも、怒られないし、逆に気楽に「はい、いいよ、あったら、呼ぶから」というふうにしつこく声かけられたり、お客様が聞こえない程度で冗談を言い合ったりするし、自分に合うという。

◇ 人間関係が楽しい。皆優しいし、最初親しくなかった時から、話題づくりとしても、学校のことについて、よく聞かれたりして、だんだんいろいろ話せるようになって、普通二人か三人か仕事に入っていて、雰囲気がいいという。

◇ 「仕事じゃなくても、しょっちゅう遊びに行く。さびしい時とか、いやな事があったときとか、大人の意見が欲しくて、大人と話したい気持ちになったりするとか、

自分のことをよく知っている友達よりも、自分のことをある程度分かっているような人たちに言ってほしい、自分をよく知っている友達はすぐ自分をフォローに入るから、それじゃなくて、それなりに私のことをしているからこそ、こうじゃないののような大人の意見が欲しかったりする時とか、大人の目線だから、いい参考にしたい。」という。親の前で、心配させてしまうから、楽しいことより、悩みの話をしたくないらしい。

◇ 家に近いし、ラーメンが好きな自分にとって、賄いラーメンとして好きなラーメンを作ってくれるから、すごく嬉しいことだから。

◆ 最近しょっちゅう日雇いのアルバイトを土日または金曜日にたまに入っている。

・ケータリング: コンサートスタッフみたいに、コンサートの来てもらう人のお菓子とか、コピーとかの雑用をしたりした。初めてのコンサート関係のアルバイトだし、自分一人だし、隣にアーティストさんもいるし、絶対失礼なことをしないようにとりあえず動き出してとりあえず仕事を探して、走り回ると思って、すごく頑張っていて、そのおかげで「君よく働いた」と褒められたそう。

・靴販売: 同じ給料をもらっているから、同じことをやらせられたいが、割り振りされて、不満に覚えていた。あまり人数が多すぎて、自分がいなくてもかまわないほど、やりがいを感じなかった。

・チケット関係: パートナーもよく協力してくれたし、申し訳ないと思うぐらい楽な仕事だった。

最近やっていた日雇いの仕事は何か習ったことより、むしろラーメン屋さんで習ったなるべく早く動くとか整理しないと判断できないとかが生かされた気があるという。

3.2.2 アルバイトを始めたきっかけ

高校の時はもともと吹奏部に入ろうと思ったが、あまり雰囲気がよくなく、結局は月に一回しか入っていない花道部に入ったから、部活に忙しい友達に比べて、暇な時間結構あるから、一緒に遊ぶ相手がいなかったし、勉強もある程度でできたらいいやと思ったし、時間の無駄遣いしたくなく、別に何かのためにお金を貯めるつもりもなかったが、なんとか稼ごうと思ってアルバイトを始めた。

アルバイトを始めたきっかけとして、大人とかかわりたい思いもあった。「ずっと高校の中の皆としゃべったりするのだと、自分からどこか行かないと、何も広がらないし、経験もできないし、そしたら、バイトでとか、大人の人と関わってみようとか言葉遣いとか何とか変わるかな、自分のためになると思った。」という。

大学は一年生の時からもうアルバイトをしなきゃと思って、ずっと探したけど、5回ぐらい受けたけど、あまり受からなくて、二年生の四月はラーメン屋さんの張り紙を見て、じかに行って、面接を受けて、一週間一回か二回の程度の約束でアルバイトをやり始めたという話であった。最近の日雇いのアルバイトは旅行とかのためにお金が欲しくて、友達にこういう考えを伝えて、紹介してくれて、日雇いのアルバイトでまた新しい友達ができて、どんどん日雇いの仕事の紹介が来ているという。

3.2.3 アルバイトから学んだこと

・ある程度の金銭感覚の形成

高校のアルバイトは今より二倍ぐらい稼いだのが、お金を貯めた記憶がなくて、特に何に使ったのかもよく覚えがないのに対し、いまは、アルバイトのお金でパリとかへ旅行に行ったし、韓国旅行のために意識的にアルバイトを頑張ってお金を貯めているらしい。

・丁寧な言葉遣い

「目上の人に対する言葉遣いとか、お客さんに出す言葉遣いとか、どんなに冗談を言っても、その中でちゃんと敬意を払うみたいなのはこんな自分でも気をつけるようになった。それは伝わっていないかもしれないけど、伝わるように頑張っている。謙虚を言うようになった。」

自分のやりたいようにするのではなく、必要な時は大人らしく振舞うことができるようになったのは社会人への一つの成長だと言える。

・冷静に対応：

「高校生の時にちょっと言い出された時に『あっ、ちょっと待ってください』とか、『分からないんですけど』とか、普通にこういうふうになっちゃうけど、ちゃんと冷静に『少々お待ちください』とか、『ただいま聞いて参りますので』、とか、冷静にならないと言えないことができるようになった。」

経験が積むと冷静に対応できるようになったかもしれないが、この過程の中で心も成熟しつつある。

・自分で仕事を見つけて役に立ちたい

仕事をする時、言われなくても、することを見つけてやること。相手は自分のことを信頼しているし、いろいろやってくれるから、自分も手伝うことが何かないかなと思うところまで行くように気をつけていこうと思うようになった、そしたら、もっと信頼してもらえるし、もっと仕事任せてもらえるし、もっと役に立っているし、役に立ちたいと思うようになったという

・仕事からの信頼関係

「さびしい時、いやなことがあったとき、しょっちゅうお店へ行く。よく自分のことを知っていて、ついフォローしてくれたりする友達より、自分のことをある程度していたバイト先の大人たちの意見がほしくなる。」

悩みを聞いてくれたり、アドバイスをくれたりする相手が出てきた。仕事の中で築かれた信頼関係はプライベートに伸びて、生活の中の新しい頼り場が作られたと考えられる。

3.3 まとめ——家族や学校と違う頼る場

Vさんとは前に知っていて、一緒に勉強したりしたことがあるから共通な話題があるし、Vさん自身は性格が正直で明るくて、話しやすい相手である。インタビューの前に一緒に食事をして、気楽に生活の話題から久しぶりの距離感を消えたとし、自分が留学生であることで気を配ってくれるし、3時間もかけて、インタビューを済ませた。インタビューのときは自分から質問を出して、どんどん話してくれて、すごく詳しくいろいろ聞かせてもらって、楽しかった。

Vさんの場合は単純に時間を無駄にしたくなく、お金を稼ごうと思ってアルバイトを始めたが、何種類のアルバイトを経験して、あまり気に入らないコンビニや回転寿司もあるし、いまでも働いている大好きな職場のラーメン屋さんもある。日雇いの仕事も何も分からないけど頑張って努力を認めてもらったアルバイトもあれば、不満を持ちながらやり遂げたアルバイトもあれば、全然楽しかったアルバイトもある。いまの時点で、アルバイトで学んだこと、役に立ったこととして考えると、ラーメン屋さんでのアルバイトが際立つ。日雇いの仕事から何か習ったというより、むしろラーメン屋さんですべて自分のする仕事を自ら見つけなきゃという自覚などがすごく役に立ったという。最初コンビニでのアルバイトはお客さんがいっぱいいるのに何をするか分からない状態から、役に立ちたいと思って、自ら仕事を見つけてやるようになったのは積極性が向上したからだと考えられる。

ラーメン屋さんでのアルバイトはもちろんそのような自覚ができて、将来の職場でも、何とかの手伝いでも、どこでもいつでも絶対役に立つと思うが、むしろVさんがラーメン屋さんで楽しくアルバイトをしていることは印象深かった。ラーメン屋さんでのアルバイトは夜八時から十一時までの単発もあるし、夕方の五時から翌日の二時まで九時間出勤のラストという仕事もあるという。ラストのとき、店に着いて、少ししたら、夕食としての賄いラーメンが食べられるし、普通二人か三人か一緒に仕事していて、仕事に邪魔しない限りお互いに話してできるし、手が空いて来る時、お客さんの見えないところで自由に休憩したり自分のことをやったりしても大丈夫だし、暇なとき、悩みがあって、相談に乗ってもらいたい時、お店に行く習慣もできたし、お店の人たちはやさしくしてくれるようにいろいろなメリットというか、楽しいところをいくら話してくれたとしても、二時までだという点から見れば、すごく大変な仕事だと言わずにいられない。でも、留学から帰ってきたら、もしできれば、またここでアルバイトしたいほど、楽しくアルバイトしているのはお金欲しいだの、時間つぶしだの、大人とかかわりたいだのの目的を遂げるためではできかねると思う。アルバイトを通してお店の人たちと絆ができたから、家族や学校の友達と違う世界の人たちとの間のこういう切っても切られないかわりに比べれば、二時に一人で家に帰るさびしい気持ちやら、店が忙しい時疲れる気分やらはなんでもないのでないか。

Vさんが留学する前の最後のアルバイトの時、私はラーメン屋さんへ食べに行った。お客さんがいっぱい忙しかったらしいし、工作中なので、Vさんと話すことができなくて、残念だったが、Vさんの仕事ぶりを見て、いろいろ考えさせられた。その時、お店でVさんを含めて、3人が働いていて、Vさんはホールの方で、お店に入ったお客さんに「いらっしゃいませ」と言ったり、お冷を出したり、食券をもらって厨房の店員さんに注文を伝えたり、作られたラーメンを出したりするのをもちろんしたし、席が足りなくなると、お客さんにかけて待ってもらったり、手が空いてくると、洗った食器を拭いたり、余裕があると、裏でほかの店員さんと話したりしていた。お客さんがどんどん入って忙しかったが、私の目に入ったのは心にゆとりを持って、冷静に対応していたVさんの働き姿であった。

五、終わりに

1、先行研究との比較

西・柳澤（2009）は、“アルバイト先で友人や異性など人と出合いを望んでいる人間関係目標はどの学習内容とも関連が見られなかった”と述べていた。しかし、インタビュー

で大人とかかわりたい思いがきっかけになって、高校時代のアルバイトを始めたVさんはいまのアルバイト先で頼る場ができていうことから、仲間と協力して仕事を確実に遂行するための努力や人間関係目標による絆作りの効果が見えてくる。それは人間関係目標の影響による自分からの努力もあれば、具体的なアルバイト先の仲間たちからの受け入れようにもよるものだと考えられる。

西・柳澤の研究では目標が具体的か、曖昧かにより、学習内容は目標と関連する限定されたことと幅広い領域で進むのとの区別が見えたのに対し、明確な目標を持ってアルバイトをしていたMさんと曖昧な目標でアルバイトをしていたTさんとVさんから見ると、そういう区別ははっきりしていないのである。それは学習内容の個人差によるからだと思う。Tさんの場合、アルバイトすることにより、キャリアについて、自分の懂れていた仕事から、もっと自分にふさわしくて、自分がやりたい仕事へ転換した。

2、心のユトリ——心構え

社会人というのは基準がない。しかし、社会人だと判断できる。基準がないというのは、社会に入れば、社会人になったとは言い切れないし、社会人になりたいといっても、なれるわけでもないからである。しかし、社会人に学生の備えていない心理的な条件がそろっているから、社会人だと言えるかどうか判断できるのである。

大学生から社会人へ、どの大学生であっても、この道に沿い、歩かなければならない。この道はまっすぐではないに決まっている。どう歩くのも自分の勝手である。未経験の学生として、社会人になるために、職場で転び、また立ち直ったりするケースがあれば、順調に社会に適応するケースもある。でも、いろいろ経験してから、社会に入ると、Mさんが言ったように「心にユトリを持っているから。」心理状態が違うから、早く社会人への転換が完成させられると示唆される。

そういう経験の中で、いろいろ選択肢がある。アルバイトは一つだと考えられる。その可能性を調べるために、筆者はインタビューを行った。

社会人としてのMさんは今も長い人生の中で経験のピラミッドを建てている途中だが、アルバイトをした経歴で学んだことが大学生から社会人へ転換する時にそのピラミッドの土台を固めた。Mさんがお客さんとのふれあいで得た満足感を感じ、働く意欲が強まるように、自分の努力でやりたいことを遂げることで満足感を得て、生きがいを感じ、自信を持って人生を歩んでいくことができる。お金の面からいうと、アルバイトで稼いだお金は旅行や留学とかの資金になって、さらにいろいろ経験することが可能になって、成長させられる。Tさんは習ったことというより、価値観の形成につれて、自分が変わりつつである。MさんとVさんより幅広いアルバイトをしたから、多数な分野で経験を積み、自分の将来にはっきりとした考えがある。そこから、大学生と社会人の強い繋がりが見える。大学生になると、精神的にはかなり成長するし、いろいろ悩みながら考えるわけだから、家族と友達に囲まれ、生きてきた自分に対し満足できなくなり、「自分からどこか行かないと、何も広がらないし、経験もできないし」とVさんが言ったように、社会への好奇心や憧れの働きで自分を変えていきたい、社会とは関わりたくなる。Vさんは遠い将来についてあまり考えたことがないらしいが、旅行であろうが、留学であろうが、一つ一つ目の前の目標を見つけて、自分の人生を歩んでいると見える。

三人のインタビューを見れば、アルバイトを始めたきっかけはどうであろうと、経験した過程は楽であろうが大変であろうが、共通なところとして、社会人に必要な、大学生としてはまだ備えていない素質を持つようになった結果が見える。言葉遣い、自立能力、金銭感覚、上下関係などといった面で社会人らしくなったのはいうまでもない。それに加え

て、やったことがないので、どうすればいいか分からないようなパニックな状態になりやすいのではなく、冷静に出来事に対応でき、さらに積極的に解決方法を考えようとする。命令に従い働くより、自ら働きだす意識が出てくる。それは心にゆとりを持つようになることである。

後書き

平成 24 年の十月に、日本語・日本文化研修留学生として、私は日本へ留学しに来た。日本での生活につれて、日本人大学生の立派な姿やアルバイトの一般性に感心し、その両者の間で繋がりを感じ、調べ始めたのです。感想のままに書かれていると見えるかもしれませんが、専門家の論文ほど研究価値もない代わりに、一人の大学生として、同世代の人として見る視点から考えたことに自分のオリジナリティがあると思います。

自分も帰国して、四年生として就職活動に入らなければならないことになりましたが、どうやって大学生から社会人へうまく転換できるというのも私自分がいままで考えてきたことです。

インタビューをする時、外国語の日本語を使ってやったから、自分の悪い質問方のせいで、相手を困らせたりしたことがあるし、インタビューに聞き取れない部分をいちいち聞けないから、後で録音を聞いても分からないところがあるので、大変だったけど、相手は自分が外国人だからいろいろ気を配ってくれたし、面白いアルバイトの経験を詳しく聞かせてもらって、すごく楽しい経験でした。

論文を完成させた後、インタビューした対象は三人とも女の方だったと気づきましたが、男の人の場合が入っていないということは一つの残念なことだと言わざるを得ないので、

大学時代は悩みながら考える時期だから、経験が欲しいといっても、必ず得られるに限らないから。あまりにも考えてもしょうがないことだから。とりあえずアルバイトを経験したらどう思うようになった。

なお、この論文はインタビュー対象のMさん、TさんとVさんのご協力を頂い、牲川波都季先生のご指導を賜り、同じく授業を受けた日研生の金知恵さんのご助言をいただき、ここで心からお礼を申し上げます。

引用文献

- 1、岩田弘三 (2005). 『大学生のアルバイト目的と学業』 武蔵野大学現代社会学部紀要第6号 11-22
- 2、松崎康裕 (2011). 『アルバイトの調査から見えること (シンポジウム 今日の厳しい状況のもとで働く意味・意義をどう捉えるか)』 経済教育 (30), 12-17
- 3、杉山成 (2009). 『アルバイト経験はキャリア意識の形成にどのような影響を与えるのか (2) : アルバイトの位置づけに関する検討』 小樽商科大学人文研究 (2009) 117 : 1-14
- 4、田村隆宏・木村信貴 三井理愛・松瀬誉幸 (2011) 『大学生の心理的 well-being に及ぼすアルバイト活動の影響』 鳴門教育大学研究紀要 (26) 43-52
- 5、西宏樹・柳澤さおり (2010). 『大学生のアルバイト活動を通じた学習—アルバイトの目標と活動の意識化の効果—』 中村学園大学・中村学園大学短期大学部研究紀要 (42), 285-292

おわりに

2011年10月から2012年8月まで、金知慧さんと蔡佳凝さんは、日本語・日本文化研修留学生として秋田大学で学びました。本冊子は、その最終成果である二人の論文を掲載したものです。

この論文を書くにあたっては、週1回の授業（留学生のための課題研究IA/IB）を中心に、準備と執筆を進めてきました。2011年2学期は、研究テーマを見つけるための基本的な考え方を理解しつつ、テーマのアイデアを考えていく期間としました。この学期は、交換留学生の邵也さん（中国・蘭州大学）もクラスに参加し、細川英雄『論文作成デザイン—テーマの発見から研究の構築へ』（2008、東京図書）を議論しながら読みました。本書は、研究テーマというものは、自分が生きることにとって本当に重要な問題を自他と表現し合いながら見つけていくものだという、研究の基本的な考え方を示すものであり、担当者としては、研究と論文執筆の目的を理解してほしいと考えていました。

それと同時に、毎週の秋田の暮らしの中で特に印象的だった出来事や見たり読んだりしたものを、日記風にまとめ、クラスで報告し合う活動もつづけました。日々の生活を語り合う活動を通じ、具体的な生活の中から、個々人の価値観に密接に結び付いた研究テーマを発見してほしいと考えたためです。

この活動を経て、2012年1月ごろには、今回の論文のテーマがほぼ固まりました。金さんは有島武郎の『或る女』に、蔡さんは秋田在住大学生のアルバイト生活に取り組むこととなりました。金さんは、秋田や日本での生活そのものをテーマには選びませんでした。論文末尾の「後書き」が示すように、以前からじっくりと向き合っていたと考えていた作品を、この機会を利用して取り上げることに決めました。蔡さんは、秋田で同世代の学生たちのようすを見て、アルバイトによる拘束時間が長いこと、しかも正社員と変わらない業務を担っていることに驚き、アルバイトを研究テーマに選びました。

金さんの最終論文は、「有島武郎と＜葉子の愛＞」です。前・後編からなる長編小説で、先行研究の蓄積も多い『或る女』をあえて選び、丹念に作品に即して葉子という人物を読み込みました。その上で、作者・有島の愛と死に関する考え方と、『或る女』の葉子のそれとを引き比べました。

金さんがとらえた葉子の姿を、もっとも端的に表しているのは、「愛をする」という表現です。読者は、論文がはじまってすぐに出会う「葉子は愛をした」の一文に違和感をもつかもしれません。その後もこの論文では、「愛する」ではなく「愛をする」という表現がたびたび使われます。私も金さんとこの表現をめぐる話し合いでしたが、金さんは、愛を選びそこに自分を賭していくという、葉子特有の愛の仕方を表したかったので

あり、その金さんの意図は、「愛をする」ということばでしか表現できなかったものです。この一点からでさえ、『或る女』に対する金さんの読みの深さと独自性がうかがえ、また実際に先行研究と比較しても十分に質の高い作品論となりました。さらに後書きが示すように、葉子の愛と死への深い共感、金さん自身の生きることへの思想に由来するもので、本論文では、ち密な論証の向こうに論文作者の思いをうかがうことができます。私自身も、金さんが見出してくる葉子の愛と生の姿に、死に代えられる愛とは何か、そしてそうした愛を知らながらも生に臨んでいこうとする人間とはいったい何なのかと、毎週問いを突き付けられる気持ちでした。

惜しむらくは、金さんがもっとも着目したかったのは葉子の愛と死の関係であったということが、論文を仕上げる段階になってはっきりしたことです。研究を続ける機会があれば、ここに着目して『或る女』全体を考察しなおしてみたいと思います。

蔡さんの最終論文のタイトルは、「大学生から社会人へ——アルバイトが心のユトリを作る」です。この論文の最大の特長は、秋田県在住の3名の元大学生および現役大学生に、一人ひとり十分な時間をかけてインタビューを行った点でしょう。研究開始当初、蔡さんは、周囲の大学生のアルバイト状況が、中国のそれとはまったく異なっていることに驚き、日本人の大学生のアルバイトの現状を全般的に知りたいという希望をもっていました。しかし周囲の大学生の状況が日本の大学生を代表するとは言えないこと、先行研究を見てみると、アンケート調査を統計処理で分析した量的研究が圧倒的に多く、大学生一人ひとりのアルバイトの現状とそこで得たものの内実は明らかにされていないことが、次第にわかってきました。インタビューとその考察という質的調査法がどこまで客観性をもつのか、それを公にすることの意義は何かということについて、蔡さんは真剣に悩んでいましたが、どんな背景を持ったどんな人が、どんなアルバイトをし、どんなことを感じながらどんなものを得たのか、そうした積み重なる「どんな」という問いに、蔡さんは、一つずつ答えを与えていきました。その結果が、日本の秋田という一地域に暮らしている人々の生活を、アルバイトという視点から具体的に描き出した本論文を生み出しました。

蔡さんには、結論に至った「心のユトリ」というキーワードから、もう一度インタビュー結果全体を考察し、それを蔡さんの根本的な問題意識である、中国の大学生の現状へとつなげてほしいと思います。

金さん、蔡さん、お疲れ様でした。1年間の論文執筆の過程と成果が、今後の二人の人生に幸をもたらさんことを。秋田から楽しみに見守っています。

牲川 波都季（秋田大学国際交流センター）

2011-2012 日本語・日本文化研修留学生 論文集

発行日 2012年8月1日
発行 秋田大学国際交流センター牲川研究室
010-8502 秋田県秋田市手形学園町1-1
電話+81-(0)18-889-2865
著者 金 知慧, 蔡 佳凝, 牲川 波都季
発行兼編集責任者 牲川 波都季
segawa.class@gmail.com
